IS《インフィニット・ストラトス》～五代雄介の異世界物語～

空我青空旅人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２０００の技を持つ冒険家「五代雄介」は、グロンギの王「ン・ダグバ・ゼバ」との戦いに勝利してグロンギによる未確認事件に終止符を討つ。そして五代は冒険をしているところに突然灰色のオーロラが現れて五代を包みこんでその場所から消えてしまう。そして、五代が目を覚ました場所は〝インフィニットストラトス〟通称＜ＩＳ＞と言う女性だけしか使う事が出来ない世界に来てしまう。五代雄介の新たな物語が始まり、今新たに伝説を塗り替えようとしているのだった…。

目次

EPISODE.00「序章」 1
EPISODE.01「IS」 10
EPISODE.02「接触」 17
EPISODE.03「説明」 25
EPISODE.04「天災」 32
EPISODE.05「同居」 41
EPISODE.06「G3」 50
EPISODE.07「対面」 58
EPISODE.08「試験」 66
EPISODE.09「探索」 73
EPISODE.10「学園」 78
EPISODE.11「質問」 86
EPISODE.12「親睦」

EPISODE.13「代表」 90
EPISODE.14「仲裁」 98
EPISODE.15「驚愕」 108
EPISODE.16「更識」 113
118

～ＥＰＩＳＯＤＥ．００「序章」～

２００１年《冬》

長野県下高井郡

それは　吹雪が吹き荒れる　雪山だった

猛吹雪で一面が　銀世界で　白い雪が靄のようにかかっている

まるで白い空間のようだった。

その空間の中に　二つの影　があった

一つは戦士の姿で……
白くて神々しく　強い戦士

もう一つも戦士の姿…
黒く禍々しく　そして赤い眼の強い戦士だった

両者は　白い空間（雪景色）の中で　ゆっくりと歩みより……

白い戦士は手を翳すと…黒い戦士の身体から突然炎が発火し、黒い戦士は苦悶の声を

発する…

黒い戦士は苦悶の声を発するも白い戦士と同じ様に手を翳すと、白い戦士の身体から炎が発火していく…しかし少しよろめく程度で多少のダメージにはならず、二つの戦士はゆっくりとゆっくりと歩みより……

そしてお互いに身体の炎を　腕で払って掻き消しながら走り出して……

両者は互いに拳を突き出してぶつかって――――――

「ハァァァァァァッッッ!!!!!!!」

ーーーーーードスッ!!!!ーーーーーー

「「グッ!!!!!」」

ーーーーードサッ!!!!!!!!!!ーーーーー

お互いの拳は互いの身体にぶつかってそこから吹き出す様に血が出てて二つの戦士は倒れるもすぐに立ち上がり…

「おりゃあ!!!!」

「ハァっ!!!」

ーーーーードクシャ!!!!ドクシャ!!!!ーーーーー

そしてまた拳をぶつけ合い　殴り合う

「フッ!!!!!!」

「グハァ!!!!!」

「おりゃあ!!!!!」

ーーーーーガシャ!!!ビキビキビキビキッ!!!ーーーーー

「グアッ……!!!!!?」

黒い戦士は　白い戦士の腰にあるアークルを殴りその衝撃でヒビ割れが起きて白い戦士は苦しみ出して……

「フゥ……フゥ…おりゃあ!!!」
「グッ!!!!」
「おりゃあ!!!おりゃあ!!!おりゃあっ!!!」
「っ!!!?ハァッ!!!!」

ーーーーガシャ!!!!ビキビキビキビキ!!!!ーーーー

「ぐはぁ……!!?ぐぅぅぅぅっ!!!!」

黒い戦士は苦しむ白い戦士に追い討ちとばかりに拳を叩き込み怯ませるも、白い戦士はカウンターをする様にお返しとばかりに黒い戦士の腰にあるアークルに拳を叩き込み、自分と同じ様にアークルにヒビ割れを作り…黒い戦士は自分のアークルを触りながら苦しみの声を上げていく

「はぁ…はぁ…おりゃあっ!!!!」

「フゥ…フゥ…ハァァァッ!!!!」

そして互いに全力の拳を叩き込み同時に倒れていく

そしてお互いに立ち上がりながらも殴り合いは続き戦いは激化していき…お互いの姿が人になりながらも殴り続けていく

「フッ……フハハハッ!!ハハハッ……ハハハハッ!!!!」

「うっ……ぐっ……!ううっ……!!」

片方は笑いながら殴りもう片方は泣きながらその拳を振るう

それが永遠に続き……ふらつきは拳を振るい倒れては立ち上がり拳を振るいの繰り返し…互いの顔は痣だらけになり血も出てていて、積もっている雪には血で赤く染まり雪原に血が何度も飛び、散りそれは吹雪ですぐに消える

これが無限地獄のように続いていき……

「うっ……ううっ……ああ…ああああっ!!!!!」

「ハハハ…ハハハ……ハァッ!!!!!」

ーーーードスッ!!!ーーーーー

ーーーードスッ!!!ーーーー

「グフッ…!!!」

「カフッ……!!!」

互いの拳が同時に顔に入ってお互い血を吐きながらゆっくりとスローモーションのように倒れていく

「ごだーーーーーーーーーーい!!!!!!!!」

～EPISODE．01「IS」～

ーーー遠い遠い国の砂浜にてーーー

???「はぁ…いい天気だなぁ…静かな波の音に優しい風…それに曇りない青空……う～～んっ…！平和だなぁ～～」

砂浜に一人の青年がリュックを枕代わりにして寝転んで自然の暖かさをその身に感じてそう呟いていた。

彼の名は五代雄介といい夢を追う男２０００の技を持つ冒険家で…そしてもう一つの顔は、人々の笑顔を守る古代の戦士クウガである。長野県の遺跡〝九郎ヶ岳遺跡〟の封印から蘇った戦闘民族〝グロンギ〟の残虐な殺人から人々を守る為に同じ九郎ヶ岳にあったアークルを身につけみんなの笑顔を守る為に青年五代雄介は古代の戦士クウガへと姿を変えて過酷な戦いにその身を乗り出して…次々と迫り来るグロンギをクウガと警察達が力を合わせて倒していき最後のグロンギにして全ての元凶…未確認生命体第０号〝ン・ダグバ・ゼバ〟との戦いに勝利して未確認事件に終止符を討つ。そして五代は、戦いの中で傷ついた心を癒す為そして心から笑顔でいられるように冒険をするのだった…。

「あれから結構経ったなぁ……」

五代は、未確認事件の出来事を思い出しながらそう呟きながら拳を作りその拳を眺めながらぎゅっと強く握り締めて優しくもう片方の手で覆って優しく包み込む様にして震える拳を落ち着かせていく

「やっぱ、あの感触は好きになれないなぁ…もう、誰も傷つけたくないし…傷つくところを見たくないなぁ…」

悲しい表情をしながら青空を眺めて…

「みんなが笑顔になれる様になって欲しい…この青空みたいにね…。」

そう言って再び青空を見ながらゆっくりと目を閉じて自然の暖かさをその身に感じていつのまにか寝てしまい規則正しい寝息をたてていく

すると…何処からともなく灰色のオーロラが現れてゆっくりと五代を包み込みその場から消えてしまうのだった。

ーーーーー第三者視点ーーーーー

???「これでいい…」

メガネとコート、フェルト帽をかぶった男がそう呟く

???「彼を守る為には別世界に送らなければならない…これ以上彼に過酷な戦いをさせるわけにはいかない…。この先始まる未来のためにも…彼の向かう世界も似てるところがあるが…君ならその試練をなんなく突破するだろう…。健闘を祈っているぞ…五代雄介…いや、仮面ライダークウガ。」

そう言って、五代と同じ様に灰色のオーロラに包み込まれてその場から去って行った。

ーーーー???県???市の公園にて

五代を包み込んだ灰色は突然現れてそのオーロラから五代の姿が現れていきオーロ

ラは役目が終わった事によりそのまま消えるのであった。

「んんんっ…う～んっ…!!ふぁ～っ…よく寝た…うん?」

目を覚ました五代はゆっくりと身体を起こして一欠伸しながら目を擦るが違和感を感じて首を傾げ始め

「あれ?確か俺…砂浜にいた様なぁ～それに此処日本だし…いつのまに俺日本に着いたんだ?」

目をパチクリさせて辺りを見渡すと自分が居た場所じゃない事に気がついてしかも日本にいる事に疑問を持ちながら考え始めて…

「う～んっ…まあ、いいかっ!せっかく日本に着いたんだし…おやっさんや桜子さんみのりに一条さん達に顔を出しに行こうかな?」

考えるのをやめた五代は前向きに知り合いの人達に挨拶すると言いリュックを持ちながら立ち上がり公園を出るのだった。

しばらくして…

「えぇ～…此処何処だぁ…？」

絶賛迷子になってしまったのか五代はそう呟き始め

「そもそも此処は何処でなんか色々と変わっていてまるで…異世界に来た感じなんだけど…」

まさしくその通りである。

「う～んっ…とりあえず、何処かで聴かないとなぁ…うん？」

五代が歩きながら聴き込みをしようと考えているとある場所を見つめ足を止めた。

ーーーガヤガヤガヤ!!ーーー

そこには大勢の人達が列になって並んでいる行列を発見する。

「うわぁっ!?なんだ？あの行列は…!?」

五代もびっくりして目を見開きその行列に近づいていく

「次の方～！触って下さい～！」

女性の人がメガホン持って誘導するように呼びかけていく

五代は気になり前の男性に声をかけてみることにしたのだった。

「あの～すみません～」

「うん？なんだ？」
「この行列ってなんなんですか？」
「はぁ？君…ＩＳを知らないのか？」
「あいえす？」
　男の言葉に首を傾げる五代
「はぁ～このまま行ってもどうせダメだろうなぁ…仕方ない…恥かく前にアンタに譲るよほら…」
　そう言って男が道を譲って
「へ？あ、ありがとうございます？」
　思わず前に進む五代は首を傾げて目前にいる何か落ち込んでる男達の様子を見ながら途中で女の人に声を掛けられて申し込み用紙を渡されてそれを渋々書きながら自分の番まで待つ事に…そして
「次の方どうぞ～って…貴方で最後みたいね？ささっコレに触って下さい」
「えっ？あっ、はい！分かりました!!」
　女の言葉に自然に返事をするとそのまま前に出て来て…
「えっ？コレが…あいえす？」
　目の前にあるロボットの様なモノを見ながら近づいていき

「触って下さい～」
「あっ、はい」
女の人に言われて五代は反射的に触ろうとしてそれを見た人達はどうせダメだろうと思いながらその光景を眺める。
「……。」
ぴとっとＩＳというモノに触れ目を閉じる次の瞬間…!!
ーーーキュィィィィン!!!ーーー
「……えっ？」
『っ？!!!』
ＩＳが作動して五代は思わず目を開け気の抜けた声を出して周りの人達は、五代がＩＳに触れて動いた事にびっくりしてしまう
「す、すぐに責任者に連絡!!」
女の人は我に帰って近くにいるもう一人の女性に声をかけて連絡をさせる。
「あれ？俺…何かまずい事しちゃった？」
女の人が慌てている中…五代はＩＳに触れたままそう呟くのだった

～ＥＰＩＳＯＤＥ．０２「接触」～

ＩＳを動かした五代雄介は、町でＩＳの適性検査であった女の人に連れられて現在ある女性と待ち合わせすると言う事になり…待機していた。そして、しばらくして…

???「すまない…遅れてしまったようだな？」

凛とした声の黒髪でロングヘアーのビジネススーツを着た女性が五代と女の人に近づいてきて

女：「ああっ！千冬さんお待ちしていました！こちらの男の方が２人目の男性操縦者です。」

女の人は千冬と呼ばれた女性が来ると上機嫌な声で五代を紹介したのだった。

「あっ…どうもです。」

それに釣られて五代は軽く会釈して女性に挨拶する。

「……まさか連絡通りに二人目の男が見つかるとはな…しかも成人男性ときたか…はぁ……」

五代をじろじろと観察しては頭を抱えてため息を漏らしていく

「えっと…なんかすみません。迷惑かけたみたいで…」
　五代はバツそうに千冬と呼ばれている女性に頭を下げて謝罪をしていき
「いや…見つかってしまったからには仕方がない…貴方が謝る必要もないので頭を上げて下さい。」
　女性はそう言って五代に優しく声をかけていき
「……分かりましたありがとうございます。」
　五代も釣られて微笑み返して
「さて…色々と説明もしなければならないので私に着いて来てくれませんか？」
「あっ、はい！分かりました！」
　女性の言葉に返事をする五代
「では、彼を連れて行きますので…」
「分かりました！」
　女性はウキウキ気分でその場を去っていった。
「さて…我々も行くとしよう…」
　そう言って女性は歩き始めて
「えっ!?あっ、待って下さい!!」
　五代も遅れてその女性に着いていき…そのまま車に乗るよう言われて五代も車に

乗って車は走り出した。
「あの～どちらに向かっているんですか？」
五代は何も聴いていない為困惑気味に女性に聴いてみることにして
「着いたら教えます…その時に説明もします。それから貴方のことも色々と聴きたいことがありますので」
女性はそう言って車を運転していく
「わ、分かりました…」
女性に言葉に五代は頷くとそのまま黙ってしまう…しばらくして車はある建物の駐車場に入っていきその場で止まっていき…
「着きました…降りて下さい。」
女性はそう言って車から降りると五代も車から降りて
「此処は……学校？」
「さて…ようこそＩＳ学園へ…」
そう言って女性は笑みを浮かべて五代を歓迎する。

五代が女性に連れられて学園内を案内する中…複数の視線が五代の方に集中していき…

「なんか凄く見られてるなぁ…」

「すまないな…なんせＩＳは女性しか動かせない上此処は女子しかいない為、貴方の存在が余計に気になるんだろう。」

「そうなんですか…あっ！そういえば自己紹介してなかったですね！」

女性の言葉を聴いた後、五代は思いつく様にそう呟く

「そういえばそうだった…私はこのＩＳ学園で教師をしている織斑千冬だ。よろしく頼む…」

女性…織斑千冬は振り向いて五代に自己紹介をすると五代はポケットから名刺ケースを開けて名刺を出すと

「俺は…こう言う者です♪」

五代はいつも通りに名刺を千冬に渡して

「ああ…うん？夢を追う男…２０００の技を持つ男…五代雄介？」

名刺に書かれているのを読み上げると訝しげに五代を見つめて
「この２０００の技とはなんだ？」
「ああ！これですか？コレは…「お、織斑先生!?」うん？」
五代が言おうとすると声が聞こえてきたのでその方向に目線を向けると女性の姿はショートカットの緑色の髪でメガネをかけた黄色いダボダボ服を来た女性が息を切らしながら走ってきて
「ああ…山田先生どうしたんですか？」
「はぁ…はぁ…はぁ…れ、例の二人目の男性の履歴を調べてみたんですが…！」
山田先生と呼ばれた女性は息を切らしながら慌てた感じで千冬に説明しようとする。
「落ち着いて話してくれ…」
千冬は呆れ気味にその女性を宥めて
「す、すみません…その…あれ？織斑先生そちらの人は…」
女性は謝り落ち着くも五代の方を見て千冬に聴いてみて
「ああ…彼が二人目だ」
「ええっ!?そうだったんですか!?」
千冬が五代のことを説明すると女性は驚く様にビックリして目を見開く
「初めまして、俺こう言う者です♪」

五代は動じずに女性に名刺を渡して…
「あっ…ご丁寧にありがとうございます。五代雄介さんですか～わぁ…凄い名刺ですね！夢を追う男とか２０００の技を持つ男とか色々と気になりますね～それにこの絵可愛いです！」
女性は目をキラキラしながら五代の名刺を褒めていき
「ありがとうございます！それ２０００の技の一つなんですよ～」
五代は嬉しそうに語り始めて
「そうなんですか～…あっ！私！山田真耶って言います！ここで教師をしてます！よろしくお願いします五代さんっ！」
女性…山田真耶はニコっと笑みを浮かべて五代に自己紹介をする
「はい、よろしくお願いします！」
五代も真耶に笑顔で返していき
「んんんっ！悪いが…いいだろうか？」
千冬はワザと咽せて話し掛けて
「あっ！す、すみません！織斑先生!!」
気づいた山田真耶はペコペコと頭を下げて
「それより山田先生…一体何を言いたいんですか？」

「そ、そうです！五代さんのことで！」
「…？俺のこと？」
山田真耶の言葉に首を傾げる五代。
「は、はい！」
「それで…五代さんのこととは？」
織斑千冬は五代のことについて山田真耶に聴いてみて
「は、はい！えっとですね…五代さんの情報を調べてみたんですが…その…書かれていた資料の住所や電話番号がヒットされていなくて…」
恐る恐る山田先生は織斑先生にそう言うと…織斑先生は怪訝な顔をしながら五代を見つめて
「五代雄介さん…どう言う事か説明してくれますか？貴方は一体何者なんですか？」
怪しむ様に五代を見つめながら腕を組み警戒をしていく
「……（俺の情報がダメってことは…まあ、ある程度予想はついていたから驚かないけど…話さないといけないなぁ…）」
千冬に睨まれながら五代は心の中話すかどうかを考えておりしばらくして…
「……分かりました。話します…けど、場所を変えてお話しませんか？あまりいろんな人に聞かれたくないので…」

五代は決心して話すことにして千冬と真耶を真剣な表情に見つめていく

「……分かった。では、案内するからついてきてくれ」

そう言うとスタスタと歩き始めそれを追う様に真耶も慌てて着いていき五代もその二人の後を追う事にして…

「（一条さん…俺…どうやら異世界に来ちゃったみたいです…。）」

そう心の中で思いながら共に未確認と戦った相棒のことを思うのだった。

～ＥＰＩＳＯＤＥ．０３「説明」

とある部屋に着くと千冬に座るよう言われて五代はソファーに座るとテーブルを挟んで千冬と真耶は五代に向かい合うように座り始めていく
「それじゃあ…五代さん話してもらえますか？」
「はい…その…一応確認なんですが……本当になかったんですよね？」
「あっ、はい！五代さんの履歴…えっとＩＳ適性の申し込み書の通りに調べてみたんですが…その……」
山田真耶はとても言い辛そうに答えて
「あ～やっぱりですか……」
五代は確信していたが改めて聴くと若干困った顔をして頬をかく
「やっぱり…とは？五代さんはこの状況を理解していたんですか？」
「あっ、はい…なんとなく予想していたんですが…山田さんの話を聴いて確信しましたけど…」
「ほう…では五代さん話して下さい。」

「あっ、はい…結論から言うと…俺この世界の人じゃないんです…別の世界からきた人間なんですよ。」
　五代は二人にそう告げると…
「……えっ？えええええっ!?」
「……」
　五代の言葉に山田さんは驚きの声をあげて千冬さんは声には出さなかったが驚く顔をしていた。
「あ～…やっぱり驚きます？」
　二人の反応を見て五代はそう呟き
「お、驚きますよ!?いきなり過ぎますし！」
「山田先生落ち着いてください…」
　興奮気味の山田さんを千冬さんは宥めていき
「す、すみません織斑先生…というより織斑先生はどうしてそんなに落ち着いているんですか？」
「私だって驚いているさ…ただ何となく納得してしまうんだ。」
「納得ですか？」
　千冬の言葉を聴いて首を傾げる山田さん

「ああ…まず五代さん…貴方はＩＳをご存知ですか？」
「えっ？いや…よく分かりません…」
「なるほど…」
「あの…俺からも良いですか？」
　五代も質問する様に手を少し上げて
「むっ…すまない。何が聞きたいんだ？」
「えっと…今って西暦２００１年だったりします？」
「っ!?い、いや…今は西暦２０ＸＸ年だぞ？」
　五代の問いに目を見開くもしっかりと答えていき
「えっ!?２００１年って…もしかして五代さんは過去からきた人なんですか!?」
　五代の言葉を聴いて山田さんは更に驚くが…
「いや、それはないだろう…山田先生の調べたのを想定すると過去からというよりもう一つの日本…所謂……」
「平行世界…ですよね？」
　千冬は真耶に説明すると五代がその答えてを言って千冬に聴いてみると「そうだ」っと頷きながら返していく
「う～んっ…やっぱりそうかぁ～」

「って！五代さんはどうしてそんなに落ち着いているんですか!?」
　五代の発言に思わず声を上げる真耶
「まあ…俺冒険野郎だからね～トラブルはつき物だと考えるとそこまでねぇ…それに色々あったから余計にね…」
　五代は苦笑いしながらサムズアップをして答えていき
「何というか…頼もしい発想だな…」（――――；）
「そ、そうですね…」（汗）
　五代の発言に二人も苦笑いをしながら冷や汗をかくのだった。

　しばらくして…
「あっ！良ければＩＳの事に関して教えてくれませんか?」
　落ち着いた中…五代は思いつくようにＩＳの事に関して二人に聴いてみることにした。
「いいだろう…その事に関して説明するつもりだったからな…それに五代さんは此処ＩＳ学園に通う事になるからな…」
「えっ!?そうなんですか!!?」

千冬の思いもよらないカミングアウトに五代は驚いて聞き返す
「ああ…決定事項だ。」
「そっかぁ～…この歳で学校に通うのか～」
五代は複雑そうな表情をして
「では…ＩＳの事について説明するとしよう…ＩＳとは《インフィニットストラトス》の略で宇宙での活動を目的としたマルチフォームスーツだ。」
「へぇ～宇宙に行けるスーツなんだね！凄く憧れるねっ!!」
千冬の説明を聴いて五代は笑顔になりながらＩＳの凄さを感じるのだった。
「……」
そんな五代の姿を見て千冬は目を見開いて関心した気持ちになるも同時に複雑そうな表情もしていく
「あれ？どうしたんですか？」
五代は千冬の様子が変だと気づき首を傾げながら聴いてみて
「すまないな…感動しているところ悪いが、現状そんなメルヘンチックなモノじゃあないんだ。」
「えっ？」
「色々あってな…今のＩＳの在り方はスポーツと言うカテゴリーになっているんだ…。」

「えっ?そうだったんですか?でも…スポーツならまだ…」
「ＩＳは兵器として見てる人も数多くいる…その為戦争が起きてもおかしくないのも現状だ…。」
「そうだったんですか……。」
千冬の説明を聴いて五代は若干暗い表情をして
「で、でも!此処ＩＳ学園でＩＳの勉強をやっていますのでそう言う事はまずないですよ!それに国同士ＩＳを使った戦争は禁止されていますので…!!」
真耶はフォローする様に慌てて伝えて…
「山田先生の言う通りだ。だが、別の意味で問題があるからそれもそれで厄介だがな……」
真耶の話に同意するも千冬は頭を抱えてもう一つの問題を呟く
「もう一つの問題…そういえば…ＩＳは女の人だけみたいなことを言っていた様な…それに関係したことですか?」
「鋭いな…五代さんは…ああ、それが今一番問題になっている女尊男卑だ。」
あまりの洞察力にビックリするも真剣な表情になってそう答えていき
「女尊男卑ですか…」
五代は悲しそうな表情をしながらそう呟いて

「まあ…とりあえずここまでがＩＳの事だが…他に聞きたい事とかあるか？」
　千冬の言葉に首を横に振るう五代
「そうか…では、次は五代さんの今後について話しますので「ちーーーーちゃーーーーんっ!!」…はぁ、来てしまったか…」
　千冬が五代の今後について話をしようとすると突然大きな声が聞こえて来て千冬は頭を抱えながらため息をして
　ーーードドドドッ!!!ーーーーー
「わわっ!?なんだっ?!!!」
「ふぇ!?一体何が…」
　物凄い音が響いて来たので五代と真耶はビックリして慌て始めていく
　ーーードンッ!!ーーーー
「とうっ!!ちーちゃん♪?（＊≧∇≦＊）／」
　ドアが開いて勢いよくナニかが千冬に向かってダイブする様に飛んでいくのだった。

～ＥＰＩＳＯＤＥ．０４「天災」～

???：「ち～ちゃ～～んっ♪」
千冬に向かって物凄い勢いで飛びかかるナニカ
千冬：「うるさいぞ…（ガシッ）」
???：「はぎゃっ!?」
迫り来るナニカの頭を掴み呆れた感じでソレを見る千冬に掴まれたナニカは、奇声をあげて
千冬：「全く…騒がしいのにも程があるぞ?」
???：「ふっふっふっ♪流石はちーちゃん♪束さんを受け止めてくれて嬉しいよ～でも、せめてハグのほうがよかったな～♪」
千冬に頭を鷲掴みにされてぶら～んとしながらうさ耳をつけて変わった服装をした女性は嬉しそうに話しかけていき
千冬：「それで?何しに来たんだ?私は今忙しいんだ…お前に構っている暇はないんだが?」

???：「またまたまた～♪ちーちゃんはツンデレさんだねっ♪本当は、このパーフェクトプリティーな束さんに会いたかったくせに～♪よーし！そう言う事なら今からこの束さんと愛の時間をここで取り繕おうじゃないか♪」

千冬：「喧しい！鬱陶しいぞ!!（ギリギリ）」

女性のハイテンションに怒りゲージが頂点に達したのかアイアンクローをお見舞いして

???：「い、痛い！痛いよちーちゃん!?それ以上されたら束さんの頭がリミットブレイクしちゃう！ゲームオーバーになっちゃうよ!?」

千冬：「ちーちゃん言うな…それにお前の事だからコンテニューできるだろう？だから安心して逝け（ミシミシ）」

???：「みぎゃぁぁぁっ!!!」

雄介／真耶：「「……。」」（ぽかーん）

二人の戯れ合い？を見ながら口を開けて唖然とする雄介と真耶だった。

しばらくして…
???：「ううう～頭がジンジンして痛いよぉ～（涙目）」
千冬：「はぁ…元はと言う原因はお前だろうが…」
頭を摩りながら涙目になる女性に千冬は溜息をしながらジト目で女性を睨んで
雄介：「えっと…織斑さん？」
千冬：「んっ？ああ、コイツなら大丈夫だ…なんせ頑丈に出来ているからな」
空気だった雄介は恐る恐る千冬に呼びかけて女性のことを聞こうとするも千冬は雄介の思考を理解して女性を親指で指しながらそう言って
???：「もう～ちーちゃんのいけず～」（ブスっ）
千冬：「もう一回逝くか？」
女性は不満そうに頬を膨らませるが…千冬は睨みながらゆっくりと女性に近づいていき
???：「あはははは っ！冗談！冗談だよ～！ちーちゃんはノリが悪いなぁ～♪」
千冬：「はぁ…全く…それで何しに来たんだ？」
女性を見ながら溜息をして、千冬は何しに来たのか女性に問い始める。
???：「そうだった～！危うく忘れるところだったよ♪」
そう言ってくるりと雄介の方に向きを変えて

???：「はじめまして～異世界の訪問者さん♪私はＩＳの産みの親にして天災科学者の篠ノ之束さんだよ～ハロー♪ハロー♪」

雄介：「あっ！はじめましてです。俺は五代雄介って言って冒険家です！あっ、これ俺の名刺です。」

うさ耳女性こと篠ノ之束は雄介に挨拶して、雄介も束に笑顔で挨拶を返しながら名刺を渡す。

束：「ありがとうね～生憎名刺は無いから渡せれないけど…ふむふむなるほど～〝夢を追う男〟〝２０００の技を持つ男〟かぁ～変わってるねっ♪」

雄介：「あはは…そうかな？でも、こうしてＩＳの開発者にすぐ会えるなんて…とても嬉しいなぁ～」

束：「ふぇ？どうしてかな？」

雄介の言葉に思わずキョトンとしながらその理由を聴いてみて

雄介：「だって宇宙に行くって凄く憧れるじゃない？それを作り出す篠ノ之さんって凄いって思ってね…幻想的な夢かもしれないけどそれを可能にするＩＳを完成させちゃうんだもん俺は凄いと思うよ？」

雄介は純粋なＩＳの在り方や束の開発技術に素直に褒めるように笑顔で答えていく

束：「……」

それを聴いた束は俯いてわなわなと震え始め
雄介：「あ、あれ？俺なんか不味い事言っちゃった？」
真耶：「えっ!?そんな事は無いと思いますよ？」
千冬：「ああ、そんな筈はないだろう…おい束！急にどうｓ「嬉しい…」んっ？」
束の様子がおかしいのか雄介は近くにいる千冬と真耶に聞いてみては二人は否定して千冬は束に近づいて肩に手をおいて揺すると束からそう呟き始めて
束：「ずっと否定されて…馬鹿にされて来た夢を…出逢ってすぐの人に…それも異世界の人に…そこまでグス…純粋に褒めてくれて…ヒグッ…うれじがだ…!!」
抑えていた感情が溢れ出してそのまま声を殺しながら泣き始めていき
千冬：「束……」
雄介：「そっか…辛かったんだね…」
雄介は束の頭を優しく撫でて子供をあやす様にして撫で続けていく
雄介：「泣く事は恥じゃないよ？…泣きたいときに泣いていいんだ。だから…今はいっぱい泣いていいんだよ？」
束：「ヒック…グスっ…！うわぁぁぁぁんっ!!!」
雄介の優しさに触れてもう我慢が出来ずに雄介に抱きついて束は大声で泣いて…雄介も雄介でそのまま抱きしめ返して頭を優しく撫で続けるのだった。

しばらくして……

束：「うわぁぁぁぁっ…／／／!!凄く恥ずかしいよぉ～!!」

しばらく泣きじゃくっていた束は落ち着くと顔を真っ赤にして恥ずかしさのあまり悶えてた

千冬：「中々レアのモノが見れて私は満足だぞ？束？」

束の姿を見てニヤニヤと意地悪笑みを浮かべている千冬

真耶：「グス…！よかったですね…束さんっ…！」

先程の様子を見てもらい泣きする真耶

雄介：「えっと…もう落ち着いたかな？」

苦笑いして束に話かける雄介

束：「ふぅ…うんっ！もう大丈夫！束さん復☆活!!」

そう言って雄介に笑顔で答えて

雄介：「そっか…！ならよかった♪」

それを聴いて笑顔でサムズアップをする。
束：「いや～久しぶりに泣いた！泣いた！心も大分軽くなったし！ありがとうねっ♪ゆーくん!!」
束は笑顔で雄介の名前をそう呼んで
雄介：「んっ？ゆーくんって俺のこと？」
束：「そうだよ～雄介だからゆーくん！ダメだった？」
束は上目遣いで首を傾げながら聴いてみて
雄介：「そんな事ないよ！ただ驚いただけだから！」
束：「そっか♪じゃあ、私の事は束って呼んでよゆーくん♪」
上機嫌になりながら自分の事を名前で呼ぶ様に雄介に言っており
雄介：「いいの？」
束：「うんっ！駄目かな？」
雄介：「わかった…よろしくね束ちゃん？」
束：「うんっ♪えへへ／／／♪」
名前で呼ばれて嬉しそうにはにかんだ笑みを浮かべて
千冬：「随分と変わったな…」
束：「そりゃね～ゆーくんのこと気に入ったからね～♪」

千冬：「それ以外にもあるだろう？」
束：「うぇっ!?な、なんのことかな／／／!?束さんわかんないよ!!」
千冬：「フッ…そうか？」
束：「う～／／／ちーちゃんの意地悪…／／／」
揶揄う千冬に頬を膨らませる束
束：「もう…ところでちーちゃんの後ろにいるメガネ巨乳娘は誰？」
真耶：「め、メガネ巨乳娘って…」
束の言葉に顔を引きつらせる真耶
千冬：「彼女はここの教師の…」
真耶：「や、山田真耶って言います！」
そう言って頭を下げる真耶に束がニコッと微笑んで
束：「よろしく～束さんだよ～まーちゃん♪」
真耶：「ま、まーちゃん？」
束：「そう♪そう♪真耶ちゃんだからまーちゃん♪」
真耶：「え、えっと…よろしくお願いします束さん」
束：「よろよろ～♪」
千冬：「本当に変わったな束…いい意味でだがな…」

千冬はそんな二人のやり取りを見ながら聴こえない声でそう呟くのだった。

～EPISODE．05「同居」～

「さて、話が脱線してしまったが…雄介」
　束と真耶そして雄介が話している中…千冬は雄介に呼びかける。因みに何故千冬が雄介を名前呼びにしているかと言うと…束と雄介が名前呼びと愛称を呼んでいる為、千冬と真耶も雄介に名前呼びにして構わないと言ってお互いに名前呼びになったのだった。
「あっ、はい！なんですか千冬さん？」
　呼ばれて雄介は千冬に近づいていき
「雄介さんの今後について話したいと思ってな…」
「あっ、そっか…俺此処でお世話になるんですよね？」
　千冬にそう言われて雄介はI聴き返していき
「ああ、それから雄介は明日模擬戦を受けてもらうぞ？」
「えっ!?」
　千冬の言葉に反応してびっくりする雄介

「雄介は一応適性検査でＩＳを動かしている訳だ…となると次に模擬戦を受けなければならないんだ。」
「そうなると…ゆーくんには専用のＩＳが必要になるわけだね♪」
　千冬の言葉に束が反応してウキウキ気分になっていき
「おい束…お前まさか…」
「実はゆーくんの専用ＩＳを作っておいたのだ♪」
　千冬の問いに笑顔でピースをしながら答えていき
「はぁ…いつのまに作ったんだ貴様は…」
　束の発言に頭を抱えて溜息を漏らし始める千冬に雄介と真耶はポカーンと二人のやり取りを眺めていた。

「えっと…俺専用っていいのかな？そんなに簡単にＩＳを貰っちゃって……」
「さ、さあ……で、でも！よかったと思いますよ？あの束さんの作ったＩＳが使えるなんて…！」
「そっか…そうだね…ＩＳにはちょっと興味あったし…何よりそれを使って宇宙にも行ってみたいからね♪」
　千冬と束の話しの最中に真耶と雄介もお互いに会話をしていて雄介はニコニコとし

ており
「うんうん♪ゆーくんが私の夢を褒めてくれたお礼に更にサービスするから此処でお暇させてもらうねっ♪バイビィ～♪」
そう言って束はドアを開けてさっさとその場から退散するのだった。
「待て束！まだ話が…！ってもう行ってしまった…はぁ…鬱だ……。」
千冬は束を呼び止め様とするも間に合わずに溜息を漏らしてそう呟くのだった。
「えっと…大丈夫ですか？」
「ああ…アイツの無茶振りは日常茶飯事だからな…ある程度は…慣れた」
遠い目をしながら千冬は雄介にそう答えて
「なんかすみません…俺のせいで…」
その様子を見た雄介は申し訳なさそうに頭を下げて謝罪をしていく
「気にするな…さてと…うるさいのはもういないから話の続きをするぞ？」
「あっ、はい…お願いします。」
「まず、模擬戦の前に束から専用機をもらう事になるが…いきなり戦闘はしないつもりだ。ある程度身体に慣れさせてから実戦に移るつもりだ」
「そうですか…」
模擬戦や実戦という言葉に反応する雄介は拳を握り締めてもう片方の手で包み込み

ながら俯く
「……雄介さん？どうかなさったんですか？顔色悪いですよ？」
「あっ…ううん、大丈夫だよ！大丈夫!!ただ…」
「ただ…？なんだ？」
「えっと…実は…二人に言わなくちゃいけない事があってね…俺…戦う事が嫌いなんですよ…」
苦笑しながら千冬と真耶にそう告げて
「ふむ…なんとなくは予想していたが…やはりな…」
「…えっ？」
「雄介さんは優しい人ってわかっていたんです…それにそんな感じがするなぁ～って話しをしている内にわかっちゃったんですよ」
「まあ…酷な事をさせる事になるが…スポーツの試合って思ってくれれば気持ちも軽くなるだろう…別に命を奪い合う訳じゃないんだ…あくまで模擬戦…ただの試合だ。」
「……そうですね。すみません深く考えたみたいです俺…」
真耶と千冬の言葉を聴いて雄介は気持ちが少し軽くなったみたいで笑顔になって二人に優しく笑いかけるのだった。
「「……／／／!?」」

雄介の笑顔を見て二人は顔を真っ赤になっていき

「あれ？真耶さんに千冬さんどうしたんですか？顔が赤いですよ？」

「なななっ／／／!!なんでもないです／／／!!」

「そ、そうだ／／／なんでもない／／／!!」

「そ、そうですか？」

「はいっ（ああっ）／／／!!」

「ならいいですけど…」

「（ううう…／／／顔が熱いですよぉ～／／／雄介さんの笑顔ってこんなにもドキドキするものなんですか～／／／？）」

「（くっ…／／／！私とした事が…不意を突かれて雄介の笑顔にドキドキしてしまった…／／／）」

二人は雄介の笑顔に当てられて顔を真っ赤にしていくのだった。

「コホン…失礼した。最後に雄介の住う場所なんだが……まあ、着いて着てくれ」

しばらくして千冬はそう雄介に告げて歩き始めると雄介は跡をついていき同じく真耶も跡を追うのだった。

「本来なら部屋を用意するつもりだったんだが…生憎簡単に事がうまく進まなくてな…入学式まで私の部屋で泊まって貰うことになる」

「「えっ!?」」

千冬の言葉を聴いて雄介と真耶は驚きの声を上げるのだった。

「どうしたんだ?二人とも驚いて…特に山田先生は…」

二人が驚いているのに対して千冬はそう聴いた上で真耶を特に訝しげに見つめており

「えっ、えっと…なんでもない…です…」

千冬から発せられる気迫にビクビクして縮こまる真耶だった。

「???」

雄介は訳がわからず首を傾げて

しばらくして雄介達三人は大きな建物に着くのだった。
「此処が一学年学生寮だ…着いて着てくれ」
そう言って大きな建物…寮館に入って行く三人…
「凄い…まるでホテルみたいですね…」
「やはりそう見えるか？」
「はいっ」
「ま、まあ…色々と揃ってありますのでホテルみたいなのはあながち間違いではありませんしね…」
苦笑いでそう答える真耶…そしてしばらく行くとある部屋に到着して
「此処が私の部屋で雄介がしばらく住うところだ…」
「そうなんですか…そのお世話になります！」
千冬に言われて頭を下げて挨拶をしていく
「何気にするな…あっ…」
ドアノブに手がいくと思い出したかの様に気まずそうな顔をして
「？どうしたんですか？」
突然止まっている千冬に声をかける雄介
「いや…そのなぁ…まあ…入ってくれ…」

そう言って覚悟を決めて千冬はドアを開けるとそこには…ゴミが溜まって缶ビール系などが転がっており服が散乱して下着もところどころ落ちていた

「すまない…本当にすまない…／／／」

雄介が言葉を発する前に千冬が顔を赤くして謝罪をするのだった。

「せ、先輩大丈夫ですか!?」

「山田くん…これほどにまで恥ずかしい事はない…／／／」

真耶の呼びかけに顔を真っ赤にしながらそう呟く千冬

ーーーパンっ!!ーーー

突然大きな音が響き二人はビクっと震え始め

「掃除やりましょう?」

優しい笑顔で二人に呼びかけて

「っ!ああっ!そうだな!」

「わ、私も手伝います先輩っ!なので掃除道具持ってきますね!」

雄介の呼びかけに千冬はやる気を出して真耶は手伝うと言って掃除道具を取りに行くのだった。

「それじゃあ…部屋掃除始めようかっ♪」

そう言って雄介はリュックを下ろして部屋の中に入って行き…千冬も続いて中に

入って行くのだった。

～EPISODE．06「G3」～

「よし！こんなもんかな？」
　自分がしばらく住む部屋を見渡して綺麗になった事を確認して五代は満足そうな表情を浮かべていた
「いや…すまなかったな雄介…部屋の掃除を大半してもらって…」
　千冬はそんな五代の姿に申し訳無さそうに謝罪をして
「あっ！大丈夫ですよ！俺も住むところなんで気にしてませんよ？」
　にっこりと笑みを見せてサムズアップをしながらそう答えて
「そうか…山田くんもありがとうな？手伝ってくれて…」
　千冬は真耶にも感謝の言葉を伝えていき
「いえいえ♪色々と先輩には助けてもらっていますのでこれぐらいは…」
「ふむ…そうか…っとこんな時間になってしまったか…」
　千冬は時計を見ると食堂の利用時間が過ぎていたのに気づいてそう呟いた
「この時間じゃもう空いていないだろうし…仕方ない外食だな……」

「あの～ちょっといいですか？」
　千冬が外で食べることにしようと案を出すと五代が手を上げていき
「むっ？なんだ？」
「よかったら俺何か作りましょうか？」
　そう言って五代が笑顔で提案していく
「えっ!?雄介さん料理出来たんですか!?」
　五代が料理出来る事に真耶は驚いており同じ様に千冬も驚いていた。
「喫茶店で働いていた事ありますし冒険する内にも人並みに作れますよ？」
　そう言ってキッチンに向かっていくとリュックの中から材料になるモノを出してカレーの入ったタッパとパン生地のモノを出して
「リュックの中にそんなのが入っていたのか…」
「あはは…と言ってもこれだけしかないですよ…」
　苦笑しながら料理を開始していき…

しばらくして…

「できました～五代特製ポレポレ風ピロシキカレーです♪」

そう言って三人分の皿にピロシキが乗っていてテーブルに置いたのだった。

「おお…これはこれは…」

「とてもいい匂いがします♪」

二人の反応は高評価でピロシキを眺めていた

「それじゃあ…食べましょうか？」

そう言って五代が座ると手を合わせていき…同じ様に千冬や真耶も手を合わせていく

「それじゃあ…いただきます！」

「いただきます」

五代の号令に二人も合わせてそう言ってピロシキを食べ始めていく

「ん～♪とても美味しいですぅー／／／」

「ああ…物凄く美味い…まさかこれほどとは…」

「いや～照れますよ…／／／」

二人に褒められて五代は照れる様に頭をかいて

「ふぅ…」
「「御馳走様でした」」
三人同時に食べ終わるのだった。
「それじゃあ…お皿片付けますね？」
「あっ、いや…私が片付ける」
「私も手伝いますので雄介さんは座って待っていて下さい」
「えっ？じゃあ…お願いします」
「この際だ…先にシャワーを使ってくれ色々疲れただろう？」
「あっ…いいんですか？」
「ああ…ゆっくり身体の疲れを流してくれ」
「分かりました！ありがとうございます！」
そう言ってバスタオルを借りてシャワー室に向かっていく

「はぁ～さっぱりした～」
　五代が着替えのTシャツとズボンで出て来て
「ああ…上がったか」
　そこにはスーツの姿ではなくジャージ姿の千冬がいた。それと同時にお風呂上がりなのか色っぽさが出ておりキリッとした感じから大分変わっていたのだった。ちなみに真耶の姿は何処にもなかった。
「あれ？お風呂入ったんですか？それに真耶ちゃんは？」
「ああ…山田くんにシャワーを借りてな？それから山田くんはもう自分の部屋に帰ったさ…」
　そう言って缶ビールを開けてゴクゴクっと飲み始めて
「ぷはぁ～～っ!!どうだ雄介も飲むか？」
　そう言って五代に缶ビールを見せて
「あっ、ありがとうございます。いただきます」

五代は缶ビールを受け取り蓋を開けてゴクゴクっとビールを飲んでいく
「くぅ～～っ！キンキンに冷えていて美味しいですね！」
笑顔でそう言うと千冬も満足そうな顔をして「ああっ！」と返して3本目を開けて
「千冬さんってお酒強いんですか？」
「まあまあだな…雄介はどうだ？」
「ボチボチですかね？むしろあまり飲みませんし…」
「そうなのか…」
こうして二人は缶ビールを飲み干してそれぞれ寝るベッドに移動して寝て一日が終わるのだった…。

ーーーー何処かのラボにて
「ふふふん♪これでよーし♪クーちゃんそっちはオッケー？大丈夫かな？」
うさ耳の女性事…篠ノ之束はキーボードを打ちながら銀髪のロングヘアーの少女に

聴いてみたのだった。
「はい、問題ありません束様…」
淡々と返しながら目の前のＩＳの最終確認をして
「ふふ♪完成♪完成♪これでゆーくんのＩＳは完成したよ♪」
鼻歌交じりながらそのＩＳに近づいていき
「しかしよろしかったのですか束様…これほどのモノを二人目の操縦者に渡して…」
「いいんだよ～グリーンだよ～♪だってだって♪クーちゃん聴いてよ！私の夢を笑わずにむしろ褒めてくれてしかも！手伝ってくれるんだよ！素敵だと思わない!?」
「そうですね…束様がこんなにも心から笑ってくださっているので…私も嬉しいと思います…そのゆーさんには私からもお礼が言ってみたいものです…。」
「にゃはは♪クーちゃんはやっぱり私の良き理解者だよ～♪」
「恐縮です／／／」
束にそう言われて顔を真っ赤にしてしまうクーちゃんと呼ばれている銀髪の少女…
「さてと♪いっくんのＩＳとは違って完全な全身装甲型（フルスキン）で今までのＩＳよりちょっと性能が上な分私の自信作だからゆーくん…喜んでくれるといいな～♪そしてゆーくんを災害から守ってあげてね？私の可愛い可愛い娘♪」
そう言って優しくそのＩＳを撫でながら優しく語りかけてニコッと笑みを浮かべる。

そのＩＳの真下にはプレートがありこう書かれていた…。

ーーーーーーーー『Ｇ３』ーーーーーーーーっと

～ＥＰＩＳＯＤＥ．０７「対面」～

翌朝目が覚めた五代は千冬と真耶と共に食事を済ませてその足で試験会場に向かうのだった。

「うわぁ～…広いですね…此処が試験会場なんですか？」

試験会場を見渡しながら五代は感想を述べると千冬に聴いて

「ああそうだ。ここ第一アリーナが試験会場であり、雄介のＩＳを操作してもらう場所だ。」

「へぇ～…あっ！そういえば束ちゃんが俺のＩＳを用意するって言っていたけど…」

「そういえば…まだ束さんは来ていないみたいですね…」

真耶はキョロキョロと辺りを見渡して

「もう来るだｒ「ちーーちゃーーーーんっ!!ゆーーーくーーーんっ!!まーーーーちゃーーーんっ!!」どうやら来たみたいだな…」

五代と千冬が束の事を話していると二人の名前を呼ぶ束の声が聞こえてきて千冬は身構えていき

「ちーーーちゃーーーんっ!!ゆーーーくーーーんっ!!まーーーちゃーーーんっ!!（＊≧∀≦＊）愛しの束さんが来たよー!!」
そう言って三人にダイブするように飛びかかっていき
「とりあえず落ち着け」
「へぶっ!?」
千冬は飛びかかる束の顔を掴みながら呆れており、顔を掴まれた束は変な声を出していく
「離してよ～ちーちゃん～!せっかくなんだからハグさせてよ～!!」
「お前にハグさせたら絶対変なことするだろう……」
バタバタと暴れる束にジト目で睨みつけながら掴む力を込めていく
「うにゃあああっ!?」
第一アリーナに断末魔が響き渡るのだった。

「う～…シクシク…ちーちゃんのばかぁ～」

頭を抱えながら涙を流してしゃがみ込む束…
「全く…ところで雄介のＩＳは持って来てるのか？」
「お～そうだったよ～♪もちろんだよ☆♪」
千冬の問いに束は笑顔でサムズアップをして答えていき
「うわぁ……楽しみだなぁ～」
「ふふ♪雄介さん子供みたいに目がキラキラとしてますよ？」
五代の反応を見て真耶は微笑ましく笑みを浮かべていき
「いや～実を言うと凄く楽しみだったので……つい」
そう言って頭をかいてハハハっと笑って
「うん♪うん♪ゆーくんがそんなにも楽しみにしてくれるなんて束さんは嬉しいよっ♪
それじゃあ…そろそろご対面といこうかな♪ちーちゃん～と言う事だから天井のシールドを解除して～！」
「はぁ…わかった…。山田くん頼めるか？」
「わ、分かりました！」
千冬に言われて敬礼しながらさっさと天井のシールドを解除に向かうのだった。

ーーーーキュィィィン!!ーーー

しばらくして天井のシールドが消え始めていくと同時に上空から物凄い勢いでコンテナが落下してきて

ーーーーヒュゥウッ…ドゴォォォォン!!!!!ーーーー

「わわわっ!?な、なんだ!?」

あまりの衝撃に尻餅をする五代

「にゃはは♪ビックリしたみたいだね♪それじゃあ♪ゆーくんのＩＳとご対面といこうか～♪」

そう言ってリモコンスイッチを押すとコンテナが開いていきそこから青の全身装甲型のＩＳが現れるのだった。

「全身装甲型だと…!?」

千冬はそのＩＳを見てビックリするように目を見開いていく

「ふっふ～んっ♪ちーちゃん驚いたでしょう～」

ニコニコしながら千冬に聴いてみて……

「……はっ！いつのまにこんなＩＳを作っていたんだお前は!!」
「えへへ～♪そ・れ・は～……内☆緒っ♪」
　束は茶化す様に言って更にウィンクで返して
「（イラッ…）ほほう…束…私は揶揄われるのとおちょくられるのが嫌いなんだが…？」
　千冬はゆっくりと束に近づいて手をバキバキと鳴らせて
「あはははっ♪怖いな～ちーちゃんは～冗談だよ～束さんジョークだからね？ちゃんと説明もするから～そんなに迫らないで…」
「だったら早くしろ…」
　千冬はギロッと束を睨みつけていき
「はいはーい♪コホン…それじゃあ♪まずこの子の名前なんだけど…あれ？ゆーくんどうしたの？」
　束が説明をしようとするとＧ３を見つめたままボーっとして
「雄介さん……？」
「……あっ！なんでもないよ！説明お願いね？」
　真耶に呼びかけられて五代はハッと意識を戻して笑顔でなんでもないと言い束に説明の続きを頼んで……
「わかったよ♪それじゃあ、説明するね～まず、この子の名前はＧ３というんだよ♪見て

の通り全身装甲型（フルスキン）だよっ♪因みにいつのまにか初期化（フィッティング）と最適化（パーソナライズ）が終了して一次移行（ファーストシフト）になっているんだ～♪」
「何…？どういうことだ？」
「いや～束さんもビックリだよ～まるでゆーくんのことを知っていたみたいな感じだったからね～奥が深いね～」
　ニコニコと説明がてらウンウンと頷いていく束であった。
「俺のことを…？（確かに俺もこのＩＳを見た時クウガに似てるって思っていたけど偶然…なのかな？この世界にクウガのこともあいつらのことも多分存在していないからない…かっ……）」
　五代は五代でＧ３を眺めながらそう考えてゆっくりとＧ３に歩み寄っていく
「そろそろ装着してみようか♪ゆーくんも待ち遠しいみたいだしねっ♪」
　五代の反応をそう捉えてカーソルキーを出現させてキーを打ち込んでいくとプシューーーッっとアーマーが開いていき…更にマスクの方も取り外して乗れる様にしていく
「ふむ…マスクは外せるんだな……」
「うん♪でもあくまで持ってきた状態だけど待機状態から起動させて装着すると普通に

マスクを被る事になるけどね～」
「まるで特撮の戦○モノやメタ○ヒー○ーだな…」
「どっちかと言うと仮○ライダーだけどね～」
　しゃべりながらカーソルキーを打ち終えて
「それからこれはＩＳスーツ着ずに装着出来るんだよ～」
「なんだと？」
「えぇ～羨ましいです…」
　束の言葉に二人はそう反応して
「えっと…普段はそのＩＳスーツを着るんですか？」
　千冬と真耶の反応を見て五代が束に聴いて
「そうだよ～見た目はスクール水着的なのだけどね～」
　あははっ♪と笑いながらチラリと千冬と真耶の二人を見て
「なんだ…」
「ふぇ？なんでしょうか？」
「なんでもないよ～ほら♪ほら♪ゆーくん♪Ｇ３に乗って♪」
　そう言って五代を乗せさせる様に誘導していく
「あっ、はい！えっと…どうすればいいのかな？」

「えっとね～その子に寄りかかる様に背中を預けてみて？」
「わかったよ」
　束に言われた様に五代はＧ３に背中を預けるとＧ３は光り始め束が持っていたＧ３のマスクも光出して引き寄せる様に五代に向かっていく…やがて光は収まり五代は完全にＧ３と一体化していく
「雄介、気分はどうだ？ＩＳの装着が完了したぞ？」
　千冬がマイクを持って五代に呼びかると五代は手と足を見てマスク越しで驚いていた。
「なんか不思議な感覚ですが…うん、慣れた感覚もして居心地いいです。」
　そう五代は答えながら普通にグーパーグーパーと手を動かしていく
「そ、そうか…しかしいきなりＩＳを操作出来るか…これならある程度の基礎を覚えれば大丈夫だな？よし…！雄介、このままＧ３の操作を覚えてもらうぞ？」
「はい！分かりました!!」
　こうして模擬戦をする前に五代は千冬や真耶…束の元でＧ３の動かし方や基礎を覚える事になったのだった。

～ＥＰＩＳＯＤＥ．０８「試験」～

Ｇ３の操作と武装を把握することが出来た五代はＧ３を待機状態にして模擬戦まで待機していたのだった。因みにＧ３の待機状態は五代にも縁があるクウガのマークをしたネックレスだったこれには五代もビックリし同時に安心もしていた。

「ところで俺の模擬戦の相手って誰なんですか?」

五代が真耶に聴くと…

「アハハ…えっとですね…雄介さんの相手は……」

「彼女だよ～」

「遅くなってすまないな五代雄介…」

真耶が苦笑いしながら言おうとすると束が指を差しては腕を組みながＩＳスーツを着た千冬が出てくるのだった。その横には国産ＩＳの打鉄が待機状態で鎮座していた。

「えっ!?千冬さんが相手なの?それに口調が変わっているし…」

「ああ、そうだ…それに口調の方は、試験官と言う事だからこんな口調だ。要は仕事だからだ」

「は、はぁ……」
「時間が惜しい…すまないが始めさせてもらってもいいか？」
「はい！大丈夫です!!」
千冬に模擬戦を始めていいか聴くと五代は笑顔のままサムズアップをして承諾するのだった。
「よし！なら展開してくれ私も打鉄を装着するからな」
「はい！」
千冬は打鉄を装着してフィールドに立つと五代もフィールドに立ってクウガのマークをしたネックレスを握り締めて
「ふぅ…Ｇ３起動ッ！」
五代の声に反応してネックレスは光出してそのまま五代の身体を鎧で包み込んでＩＳを纏っていくのだった。
「準備出来ました！」
「こちらも問題ない…」
「分かりました！それではレギュレーションはシールド８０％を切ったら負けとします！では……模擬戦を開始します！」
真耶の声が聞こえた直後アリーナ内にブザーが鳴り響くのだった。

「っ!!」
　五代はブザーの音と同時に右足にあるホルスターからＧＭ　―０１スコーピオンを取り外して発砲していくが…それと同時に千冬はブレードを展開して迫ってくる弾丸を斬り裂いていき…
「フッ!!」
　弾丸を斬りながら迫ってくる千冬にこちらも接近戦で挑もうとしていき…銃をしまって換装装備の拡張領域（バススロット）から新たな武器を呼び出してそれを装着して武器を起動するとブレードが出現してＧ３の近接武器…ＧＳ　―０３デストロイヤーで迎え撃つのだった。
　―――ガキン!!―――
　互いのブレードが激突して火花を発していき
「中々やるな！雄介!!」
「そうですか…！ありがとう…ございます!!あまり戦うのには抵抗あるけど…」
「そうか…だが……」
「わかっています…甘い考えかも知れないけど…全力で戦いますから！くっ！安心して下さい!!」
　千冬の猛攻を五代は受け流しながら真剣にそう言ってブレードを振るっていき

ーーーガキン!!ガキン!!ガキン!!ーーー
「中々の筋だが…まだまだ甘い！」
そう言って鋭い一閃をＧ３の身体に与えていきシールドエネルギーが削れていき
「うわぁっ!?くっ!!」
その勢いを利用し追撃を躱す様に距離を取っていく
「ほう…いい反応だな…」
そう言うとブレードを構えて一気に詰め寄っていき
「凄い生き生きしてますね！ハッ!!」
ーーーガキン!!ーーー
「無論だ…お前との戦いが楽しくて仕方ないからなっ！」
「楽しい…（そっか…俺深く考え過ぎたかも…これは試合であいつらみたいに命のやり取りじゃないんだ…それに此処ではＩＳをスポーツとして行っているんだった…。）」
千冬の言葉を聴いて五代は改めて実感してブレードで押し返していき
「何っ!?」
「おりゃあっ!!」
「グッ!!」
五代の攻撃がヒットして打鉄のシールドエネルギーが削れていき

「おりゃあっ!!」
　更に追撃する様にブレードを振るいあげて
「っ！甘い!!」
　身体を捻って攻撃を躱してはブレードを振るい返して剣先が五代に向かっていく
「ぐうっ!!」
　五代はブレードでガードする様にその攻撃を防いでいき
「やるな!!」
「千冬さんこそ！」
　戦闘は更に激化していき互いのシールドエネルギーがどんどん削れて
「はぁ…はぁ…」
「ふぅ…まさかここまでやるとは…驚いたな…」
「はぁ…はぁ…強い…」
「さて…五代雄介…この一撃…受け切ってみろ…」
　そう言ってブレードを鞘に収めると居合いの構えを取り
「…来る!!」
　五代はデストロイヤーを構えて
「ハァァァァッ!!」

一気に詰め寄っていき五代との距離を詰めていき
「……そこだ!!」
そう言うと五代は迫ってくる千冬の距離にデストロイヤーを消して新たに武器を呼び出していき右腕に装着し…向かえうつように構えて…アンカーみたいな武器ＧＡ—０４アンタレスを発射していき
「っ!?」
ワイヤーが迫ってくるのに対して千冬は同時にブレードを抜いてワイヤーごと五代を斬りつけていくがさっきより勢いが削れていき…
「ハァッ!!」
アンタレスでブレードを受け切ってダメージを軽減していき
「うおおおおっ…!おりゃあっ!!」
「がはっ!!」
そのままブレードを押し返してアンタレスで千冬の腹部に叩き込んで吹き飛ばしていき
「ぐぅっ!!」
「これで…終わりです!!」
「しまっ!?」

千冬はその勢いを地面にブレードを刺して勢いを殺すも五代はその好機を逃さずアンタレスを外してもう一度デストロイヤーを装備して一気に詰め寄ってブレードを振り下ろすも寸止めしていき

「……なんのつもりだ?」

五代が武器を止めたことに千冬は怪訝していき

「えっと…やっぱり…これ以上は無理です…」

「……ハァ、全く…優しすぎるぞ? 五代雄介…」

「うっ…! すみません…やっぱりちょっと抵抗が…」

「はぁ…だが、これ以上続けたとしても私の負けは確定していただろう…仕方ない…降参だ」

『え、えっと…勝者! 五代雄介さん!!』

千冬が負けを認めるとアナウンスがアリーナ内に響渡っていいくのだった。

～ＥＰＩＳＯＤＥ．０９「探索」～

模擬戦で千冬に勝利した五代は…ＩＳを解除して、タオルで汗を拭いていくとふとある事を思いつくのだった。
「あっ、そういえば…着替えのモノとかないから買わないといけないけど…どうしようか…」
「むっ…そうか…雄介さんの日用品を買わなくてはならないな…時間もまだあるし…買いに行くか…そうなると雄介さんシャワーを浴びたら校門前で待っていてくれ」
「あっ、はい！ありがとうございます!!それじゃあ、準備してきますね？」
そう言って五代はアリーナを出て行った
「さて…束…どうだった？」
五代がアリーナを出て行った後…千冬は束に話しかけていき
「うん～想像以上だったよ～あそこまでＧ３を使いこなせるなんて束さんビックリだよ…」
束はそう言って先程の戦闘データを観ながら動画を保存していき

「そうだな…山田先生はどう思いますか？」
「そ、そうですね…とても戦い慣れているって感じがしました…。」
千冬の問いに真耶はそう答えていく
「山田先生もそう思いますか…」
「はい…でも、やっぱり雄介さんだなぁ～って思いました。」
優しいままの五代と…言葉を発してニコと微笑んでいく真耶
「フッ…そうだな…それじゃあ私も着替えてシャワーを浴びたら雄介さんの日用品を買いにいく準備をしなくてはな…すまないが後のことを任せていいだろうか山田先生…」
「はい！任せてください！」
千冬に笑顔でそう返事をして
「じゃあ♪私もお暇させてもらうね～♪バイビー♪ちーちゃん♪まーちゃん♪」
そう言って物凄い速さで束は去っていく
「相変わらず逃げるのは早い奴だ…」
そう言って千冬はアリーナから去っていくのだった。

ーーーーIS学園　校門前ーーー

「うーん…やっぱり凄い見られていたなぁ～」

五代は校門に来る時にたくさんの目線を向けられ困った顔をして

「そういえば…此処に来る時に俺の後ろをつけていた水色のショートカットの女の子は誰だろう？」

五代は先程までの出来事を思い出しながら考えていると…クラクションが鳴っており、そちらに目線を向けると千冬が車に乗って待っていた。

「あっ！すみません!!」

五代は慌てて車に近づいて乗るのだった。

「どうかしたのか？考えごとしていた様だが…」

「あー……実は……」

五代は此処に来るまでのことを千冬に話すのだった。

「そうだったのか…すまなかったな…配慮が足らなかったようだ…。」

「あっ！大丈夫ですよ！気にはなりますがコレと言って別に嫌な感じはしてませんから!!」

「そうか…ならいいが…もし何かあれば言ってくれ…力になるから」
「はい！ありがとうございます！」
千冬の言葉が嬉しかったのか笑顔でサムズアップをしていく

ーーーショッピングモール【レゾナンス】ＰＭ．１３：４３
「此処で買うとしようか…」
「デカイショッピングモールだなぁ～」
五代は見上げながらショッピングモールの中に入っていき…
「買い物の前に何処かで昼食にしないか？」
「そうですね…お腹ペコペコです」
五代は苦笑いをしながらお腹を押さえていて
「フッ…では食べてから買い物を済ませよう」
「分かりました!!」

そう言って二人は近くの喫茶店に入っていき昼食を済ませた後…二人はショッピングモールを歩いて日用品を買い終えてそのまま学園へと帰るのだった。

～ＥＰＩＳＯＤＥ．１０「学園」～

「うーん…制服のサイズはピッタリなんだけど…なんか複雑な気分だよな～」
今日から学園に通う事になる五代はＩＳ学園の制服を着ながら鏡の前で身嗜みを整えながらそう呟いていき
「そんな事ないぞ？随分と似合っているじゃないか五代さん」
その後ろに千冬が腕を組んで五代の制服姿を見ながら感想を述べて
「そうですか？けどこの歳で制服を着るのはやっぱり恥ずかしいと言うか…」
「ははは…それもそうだな」
「よし！準備出来ました！」
そう言って五代は振り向いてカバンを持って
「そうか…荷造りも万全か？」
「はい！大丈夫ですっ！」
今日から部屋も変わる為その為の荷造りも完了していて五代は笑顔でサムズアップで返していき

「では、いきましょうか…」
「分かりました!」
千冬はそう言って部屋を出ると同じように五代も部屋を出て鍵を閉めて学園へと向かうのだった。

ーーー1年1組の教室前ーーー
「此処が…yんんっ!五代さんのクラスです」
「あっ!分かりました織斑先生」
教師として名前呼びから苗字呼びに言い換える千冬に五代は頷くと…」

『えっと…以上ですっ！』
教室内で声が聴こえるとそのままコケるような音が響き渡るのだった。
「なんか…中で凄い事がおきていません？」
「はぁ……あのバカ…！すまない五代さん…少し待ってくれませんか？」
中の様子を察したのか千冬はそう呟いて頭を抱えながら五代の方を見てそう言いい
「あっ、はい…分かりました」
そう言っては千冬は教室の中に入っていくのだった。

～一夏　ｓｉｄｅ～
どうも皆さん…俺の名前は織斑一夏だ。そして今俺は非常に…非常にっ！気まずい状況に陥っている！それは…
『……。』
ジーっと一夏を見つめるたくさんの女生徒達の視線が突き刺さり
「（気まずい!!男が俺一人だから余計に…！う～箒～助けてくれ～）」
一夏は気まずい雰囲気に顔を真っ青にしながら一番前の窓側に座っているポニー

テールの少女に助けてもらう様に
視線を向けるが……
「……（ぷい）」
「（ほ、箒いいいッ！無視しないでくれぇぇっ!!!）」
少女は一夏の視線に気付くが、すぐにそっぽを向かれて一夏
は心の中で叫んでいく
「…くん…おr…くん！織斑くん！織斑一夏くん……！」
「は、はい!?」
突然俺の名前を呼ぶ声が聴こえたので…反射的に慌てて立ち上がり返事をしたもの
の俺の様子がおかしかったのかクスクス…っと周りから笑い声が聴こえてきた…うお
おおおっ!!めちゃくちゃ恥ずかしいじゃないか！俺がそう思っていると……
「あ、あの…大声出しちゃってごめんなさい。お、怒っている?で、でも…！自己紹介中
であ～始まって今はおだから織斑くんの番なんだよね?えっと……自己紹介してくれ
るかな?だ、ダメかな?」
えっと…目の前の緑髪の女性…山田真耶先生が上目遣いで聴いてきて…お、おう…め
ちゃくちゃ可愛いんですけど…コレで先生だから余計に見えないんですけど…と、とり
あえず！

「あ、あの…わ、分かりましたから自己紹介ですね？ってそんなに怯えないでください」
あはは…とりあえず自己紹介しなくちゃなぁ…
「え、えっと…織斑一夏です。よろしくお願いします」
俺はとりあえずそう挨拶をするとクラスのみんなは『えっ？終わり？』的な視線が俺の身体に突き刺さる!!
「(うおぉぉっ！不味い！不味いぞ!?と、とりあえず！何か言わなきゃ……!!)」
俺はとりあえず深呼吸をして……
「……以上です!!」
俺がそう言うとガタタッと周りの女子達はずっこけて
「あれ？ダメだったのか？」
ーーースパァァァン!!ーー
「いってぇ～～～!!」
イタっ!?誰だよ!!俺の頭を殴った奴!!そう言って俺は見上げると出席簿をを持って腕を組んでいる黒いスーツを着た俺のたった一人の姉…！
「ち、千冬姉っ!?」
ーーースパァン!!ーーー
「グフっ!?」

い、いたぁぁっ!?千冬姉っ!?何故叩くんだよ!?

「織斑先生だ…馬鹿者。全く…貴様は満足に自己紹介も出来んのか?」

そう言って俺から離れる様に前に行く

「織斑先生、会議はもう終わられたのですか?」

「ああ、ホームルームを押し付けてすまないな」

「い、いえ!私は副担任ですから!!これぐらいは…」

二人の話が終わると千冬姉は教壇に立ち口を開き始めて…

「私がこのクラスの担任をすることになった織斑千冬だ。今日君たち新人を一年で操縦者に鍛えるのが私の仕事だ。先生方の話をよく聞きよく理解しろ。いいか?いいなら返事をしろ。わかったな?」

うお…それって一択しか選択出来ないってことじゃないか…相変わらず千冬姉は無茶苦茶だな…俺がそう思っていると……

「「「きゃーーーっ!!本物の千冬様よー!!」」」

「私!ずっとファンでした!!」

「千冬様に会う為に来たんです!」

「私もです!!」

おお…千冬姉人気者だなぁ～まあ…当たり前だよな～

「はぁ…全く、毎年毎年よくこんな馬鹿者ばかり私のところに集まるな…それとも何か？私に対しての嫌がらせか？」
頭を抱えながら溜息を漏らす千冬姉…あはは…お疲れ様でーす
「あの～織斑先生？ゆうｓ…五代さんはどちらに？」
「ああ…彼なら今廊下で待っているところだ」
んんっ？彼？五代さん？もしかして…
「な、なぁ…千冬姉っ？（スパァン!?）うごっ!?」
「織斑先生だ！馬鹿者!!」
いつのまにか目の前に来て出席簿で頭を叩かれた上注意された…やばい…ガチでお星様が見えたぞ…
「す、すみません…」
俺が千冬姉に謝っていると……
「えっ？千冬様と織斑くんって姉弟なの？」
「じゃあ…男性操縦者って遺伝？」
「いいな～変わって欲しいなぁ～」
「妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい妬ましい…！」
うおっ!?いつのまにかめちゃくちゃ見られてる!?と言うか最後の子怖っ!?怖っ!!

「先生～織斑先生～…」
　すると気の抜けたのほほんとした声が後ろから聞こえて来て
「むっ？なんだ？」
「私の隣の席空いてるんですけど～…もしかして～」
「ああ…そういえばもう一つ諸君に伝えていなかった事があったな…二人目の男性操縦者が見つかってな…しかもこの学園の生徒になった。入って来てくれ」
　そう言うと扉が開いて男の人が入って来たのだった。
「すまないが五代…自己紹介頼む」
「あっ、はい！えっと…はじめまして！俺は五代雄介っていいます！冒険家で色々なところを旅して日本に還って来た後にＩＳの適正に受かっちゃって此処に来ました！年齢は２５でみんなより年上だけど…気軽によろしくねっ！」
　そう言って目の前の男の人…五代と名乗る男は笑顔で自己紹介をしながらサムズアップをしたのだった。

～ＥＰＩＳＯＤＥ．１１「質問」～

～五代雄介　ｓｉｄｅ～

あの後自己紹介をしたんだけど……あれぇ～～？おかしいなぁ～何処かおかしなところでもあったのかな？反応がないんだけど…そう思っていると…

『きっ』

「き？」

『きやぁぁぁぁっ!!』

「うぇっ!?な、なんだ!?」

しばらくして返事が返ってきたと思い、聴き返そうとすると…歓声に近い大きな声が教室に響き渡り俺は思わずビックリして少しテンパってしまった。

「凄い！歳上でイケメンすぎる!!」

「笑顔が凄く眩しい男キターーーー!!」

「お母さん産んでくれてありがとうーーー!!」

「(よかった……思っていた以上に歓迎されているみたいで…)」

俺はそう思いながらホッと安心して
「すまないが五代…少しの間付き合ってもらうぞ？」
「へっ？あっ…そう言う事ですか！大丈夫ですよ」
千冬が五代に向かってそう告げると一瞬何の事か分からず首を傾げるも…五代は理解してニコっと笑顔で返事をしてサムズアップをして応える。
「それじゃあ、少しの時間…五代に対しての質問時間を与える…誰かいるか？」
『はーーーーいっ!!!』
おおっ!!思っていた以上に手を挙げているね～
「では、布仏…」
「は～いっ♪」
千冬さんが名前を呼ぶと指名された子は席を立ち…
「えっと～五代さんは～どんなところを冒険してきたんですか～？」
そう言ってのほほんと雰囲気をした少女が俺に質問してくる
「そうだね…色々なところを旅したかな？と言っても全ての国とかじゃあないからなぁ～まあ…機会があれば制覇してみようかな♪」
そう言ってその少女に笑顔でサムズアップをしながら答えて
「ほぇ～そうなんだ～」

少女はそうのほほんとしたまま返してはありがとう～♪と笑顔で言って席に座わると少女に続いて他の子達も俺に質問してきたのだった…。

～五代雄介　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

「ふむ…これぐらいでいいだろう…すまないな五代」

質問タイムを終わらせては千冬はそう言うが、五代は笑顔で大丈夫ですっ！っとサムズアップで返していく

「そうか…それはそうと五代の席なんだが……」

「織斑先生～わたしの隣が空いています～♪」

千冬が五代の席を探そうとしていると先程五代に質問していたのほほんとした少女が手を挙げながらそう言ってくるのだった。

「むっ…そうかでは、五代の席は布仏の隣だ」

「分かりました！」

そう言って五代は布仏の隣の席に向かい椅子に座わり

「えへへ～♪わたしは布仏本音だよ～よろしくね五代さん♪」

ニコっと少女は笑顔を向けては自己紹介をしていき

「こちらこそよろしくね？さっき自己紹介したけど五代雄介って言うんだ」

五代は本音に笑顔でサムズアップをしながらそう言って本音も笑顔のままサムズ

アップで返していく

「それでは連絡事項を言うぞ?」

そう言って千冬はその場で話始めるのだった。

～ＥＰＩＳＯＤＥ．１２「親睦」～

自己紹介を終えた五代雄介は、自分の席に着席すると隣の少女…布仏本音と言う子と笑顔で自己紹介を行うと今度は、教師である織斑千冬の話が進んでいき…やがて連絡事項が終わるのだった。

「連絡事項は以上だ！３０分後に授業を開始する…遅れるなよ？」

そう言って千冬と真耶は教室を出ていくのと同時に女子生徒たちは友達の方に行ったりしていき

「うーん…やっぱ女の子がこうも居ると落ち着かないなぁ～」

そう呟きながらカバンから参考書を出して読もうとすると…

「あ、あの…すみません！ちょっといいですか？」

雄介の席に近づいて来た一夏は恐る恐る話かけていき…

「んっ？あ！キミは確か…最初にＩＳを動かした男操縦者だよね？織斑一夏君だったけ？よろしくね？」

気づいた雄介は笑顔で一夏に挨拶をしていく

「あ…は、はい！よろしくお願いします!!五代雄介さん？ですよね？同じ男同士で安心しました…一人だと心細くって…」
「あ～……確かにに此処に男一人はキツいもんね？色々と辛いと思うけど…同じ男同士！仲良くしようね？」
「はい！五代さん！よろしくお願いしますっ!!」
雄介の心遣いに感動したのか嬉しそうに雄介の手を握る一夏だったが…此処は元女子だらけの学園…もちろん健全な女子だけではない為…
『キャァァァァッ♡♡♡!!』
一夏と雄介の姿を見た女子生徒たちの黄色い歓声が響き渡っていき
「な、なんだ!?」
「さ、さあ？いきなり歓声っぽい声を出してどうしたんだろう…」
一夏と雄介は困惑した為、余計に居づらくなっていきどうしようかと悩んでいると…
「すまない…ちょっといいか？」
するとポニーテールの髪型をした少女が一夏と雄介に近づいて話しかけて来たのである…
「あ、箒……」
「んっ？知り合い…？」

一夏がそう呟くと雄介は首を傾げながら一夏に聴いてみて……
「えっと…俺の幼馴染です。どうしたんだよ箒？俺に用か？」
「その…あ、ああ……」
一夏の問いに若干戸惑いながらも肯定していき…チラチラと雄介を見ていき
「……（あっ！そう言う事か!!）」
雄介はチラチラと様子を伺う箒に一瞬首を傾げるも理解して納得していき
「織斑君…せっかく幼馴染に会えたんだし、ゆっくりと世間話をしたらどうかな？」
箒の気遣いをする雄介は一夏にそう提案をしながら笑顔でそう言って…
「へ…？それもそうだよなぁ…うん！分かりました五代さん！なぁ箒…久しぶりに話さないか？」
「あ、ああ！もちろんだ！だが…此処よりも別の場所で話さないか…／／／？」
嬉しそうにしながら一夏にそう提案をしていくともじもじとしながらチラチラと一夏の様子を伺っていき
「おう！いいぜ？それじゃあ…屋上でいいか？それじゃあ五代さんすみません！席を外しますね？」
そう言って箒の手を握って教室を出て行く一夏と箒…
「ちょ／／／!?い、一夏／／／!?」

急な対応に驚く箒は手を握られながら顔を真っ赤にしていきながら一夏と一緒に教室を出て行くのだった。
「行っちゃったなぁ～～～…あ…今俺だけじゃん…どうしようかな～…」
そう言ってもう一度参考書を出そうとすると……
「ねぇ～ねぇ～五代さ～ん」
するとトコトコと雄介の机に近づく本音が話かけてきて
「うん？何かな布仏ちゃん？」
「えっとね～五代さんって今お菓子持ってますかぁ～？」
そう言ってワクワク気味に雄介に聴いてみる本音…
「へ？お菓子？飴なら持っているけど…」
そう言ってフルーツ味の飴が入った袋をカバンから取り出していき
「わぁ～♪フルーツ味の飴だ～～♪」
目をキラキラと輝かせながらその袋を見つめていき…
「よかったらどうぞ♪」
そう言って雄介は笑顔でフルーツ飴が入った袋を本音に渡していき
「ほえ？いいの～？ありがとう五代さん♪あ～後ね？私の事…本音でいいよ～～？」
「そう？じゃあ…俺のことも名前で呼んでも良いよ？歳は俺の方が上だけど此処じゃあ

みんなと同じ生徒だしね？」
「うん♪えへへ～♪わかった～よろしくね～～？ゆうゆう～♪」
「へ？ゆうゆう!?」
名前で呼んでいいとは言ったがまさか渾名で呼ばれるとは思ってもみなく驚いており
「うん♪雄介さんだからゆうゆう～…ダメ～～？」
上目遣いで雄介を見て了承を得ようとする本音
「ううん驚いただけだよ？それじゃあ…改めてよろしくね？本音ちゃん」
「こちらこそ～♪改めてよろしく～ゆうゆう～♪」
親睦が深まった事で色々と話をする本音と雄介…そして休み時間が終わった事で呼び鈴が鳴るのと同時に生徒たちは自分たちの席に着くが…一夏と箒はまだ戻っておらずしばらくして一限目のチャイムが鳴るのと真耶と千冬が教室に来てその後から二人は教室に入って来たのだが千冬に怒られた一夏と箒は出席簿で叩かれる羽目になりそのまま注意されながら席に着くように呼びかけていき…そして授業が開始されるのだった…。

「はい、ここまでで質問がある人はいますか?」
真耶がそう言って授業をしているのを離れて見学している千冬…そして生徒たちに聴いている中で一人だけ授業に付いて来れない人物がいたそれは……
「(このアクティブなんちゃらとか広域うんたらかんたらとか、どう言う意味なんだ!?全然分からねぇっ!!)」
一夏は顔を真っ青にしながら頭を抱えてパンク寸前の中で必死になって悩まされており…
「えっと〜……織斑君、何かありますか?」
「え、えっと…あの…その…」
突然当てられて冷や汗を垂らしながらパニクる一夏。
「質問があれば言ってくださいね? 何せ私は先生ですから」
「あの、先生……」
そう言われて、おずおずと挙手をする一夏。

「はい！織斑君」
「ほとんど全部分かりません……」
「えっ！ええっ!?全部ですか!?他の皆さんは分からないところはありますか!?」
一夏の発言で驚く真耶は生徒たちに聴いてみるが全員首を横に振っており理解していると言う感じでいて…
「え、えっと…ゆ、五代さんはどうですか?」
若干涙目になる真耶は不安そうに雄介に聴いてみるが…
「大丈夫です！ちゃんと予習していますから問題ないですよ?ま、山田先生の授業すっごく分かりやすいですから！」
そう言って笑顔でサムズアップで答えながら安心させる様に真耶に向けていき
「ふぇ～…よかったです～」
安心したのか若干泣く真耶。
「はぁ…とりあえず織斑……入学前に渡された参考書は読んだか?」
「えっ……?あっ！あの分厚い奴ですか?」
「そうだ…必読と書いてあっただろ」
「え、えっと…間違えて捨ててしまいました」
っと発言した次の瞬間……

ーーー『バアァァァン!!』ーーー

千冬は持っていた出席簿が一夏の頭に炸裂していく

「後で再発行してやる…一週間以内に覚えておけそれと五代…」

「はい、なんですか？織斑先生？」

「すまないが此奴の手助けを頼んでいいか？勉強を観てやってくれ……」

「あっ！はい!!もちろんです。全然大丈夫ですよ？」

そう言って笑顔で承諾する雄介

「すまないな……はぁ、わかったか？織斑…必ず一週間以内に覚えろ…わかったな？」

「い、いや…一週間以内に覚えるのはちょっと…」（冷や汗）

「やれと言っている…。わかったな？」（ギロッ！）

「……はい」

鋭い眼光で有無言わさず一夏を黙らせる千冬…この時雄介は第０号と同じプレッシャーを感じたとかなかったとか……

～ＥＰＩＳＯＤＥ．１３「代表」～

授業の内容がちんぷんかんぷんだった一夏…真耶の質問に無知識のまま答えてしまい…千冬に入学前に渡された参考書はどうしたかと問われて間違えて捨てたと答えた途端出席簿による天誅が下ってしまったのだった。しばらくして一限目の授業は終わって休み時間になると雄介は一夏の近くに来るのだった。

「だ、大丈夫？織斑君？」

心配そうに呼びかけるも一夏は頭から煙を出して反応はしなかった…返事がない唯の死屍のようｄ「まだ死んでねぇよ!?」

「えっと急に声をあげてどうしたの織斑君？」

「えっ？い、いや…何か言わなきゃいけない様な気がして…そ、それよりも！五代さん助けてください!!」

そう言って雄介の袖を掴みながら涙目で助けを求めていき…

「もちろんだよ？困った時はお互い様だしね？」

そう言ってニコっと微笑みながらぽんぽんと優しく肩を叩いて落ち着かせようとし

ていく

「うっ…うううっ…！五代さんは優しい人だなぁ～」

　涙を流しながら手を握る一夏…

「あはは…それじゃあ、勉強をしようか？俺の持っている参考書を貸してあげるから一緒に勉強しようね？」

「はい！お願いします!!あ、後！俺のことは一夏で大丈夫ですので…友達からもそう呼ばれていたし…」

「うん！わかった…よろしくね？一夏君？俺も名前で大丈夫だから…」

「分かりました！でも…何か五代さんの場合は名前より苗字で呼んだ方がしっくり来ますので…俺はいつも通りに五代さんって呼びますね？」

「うん！わかったよ…それじゃあ…始めようか？」

「はい！よろしくお願いします!!」

　そう言って一夏に勉強を教える雄介…そして簡潔にノートにまとめた物を見せながら一夏にＩＳのことを教えていくのだった。

～１０分経過…～

「ふむふむ…つまりこう言うことなんですね？」
「そうそう！一夏君は飲み込みが早くて凄いなぁ～！」
「いやいや！五代さんが教えるのが上手過ぎるですよ！ありがとうございます!!勉強を教えてくれて…凄く助かります！」
「あはは…そんなことないよ？それじゃあ…もう少し続けようか？」
「はい！お願いします!!」
「じゃあ、次は…「ちょっとよろしくて？」へっ？」
「うん？なんだ？」
　雄介が続きをしようと一夏に教えるときに突然声を掛けられて声のした方に一夏と同じ様に顔を向けていくと金髪の少女が立っており…
「まぁ！なんですの！そのお返事は!?私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度と言う物があるのではないのですか!?」
「あ、うん…ごめんね？急に話しかけられたからつい…」
「あっ、いえ…私もいきなり大声を上ｇ「いや、別に五代さんが謝る必要ないだろ？というか悪いな、俺…君のこと全く誰だか知らないんだが…？」なっ!?」
　雄介が申し訳無さそうに謝罪すると少女もいきなり大声を出したことに罪悪感を感じたことで謝罪しようとした瞬間、一夏が割って入ってきてそんなことを言うと少女は

言葉を失い一夏の方にキッと睨みつけていき…
「わ、私の事を知らない!?このイギリス代表候補生にして、セシリア・オルコットをですか!?」
「ああ、知らん」
「ふ、ふざけてますの?」
一夏の言葉にピキピキと怒りが込み上げていくセシリア…
「えっと俺は分かるから大丈夫だよ?」
そう言って二人の間に割って入って雄介は笑顔でセシリアに話かけていく
「そ、そうですか…?コホン…失礼しました。(不思議な殿方ですね…あの笑顔を見ていたら急に怒りが収まってきますわ…)」
急に感情的になったセシリアは雄介の笑顔を見て静まってジッと雄介を見つめていく
「なぁ…オルコットさん?五代さん?一つ聴いていいか?」
一夏は恐る恐る手を挙げて二人に話しかけていく
「んっ?何かな?」
「なんですの?」

「……代表候補生って……なんだ？」
それを言った瞬間…大きい音と共にクラス中の女子と雄介がずっこけたのだった。
「えっ？えっ？ええっ？」
一夏は何故クラスの女子と雄介がずっこけたのか分からずにいて…セシリアはというと…
「なっ！なななっ!!あっ、あああっ!!貴方!!本当に言っていますのっ!?」
一夏に指を差しながら口をパクパクしながら大声で問い但していき
「たたた……えっとね？一夏君…言葉通りの意味だよ？国の代表候補…つまりは、エリートって言えばわかるかな？」
ずっこけた為、腰を摩りながら立ち上がりながら説明をしていく
「な～るほど！」
理解したのかポン！と手を叩く一夏
「そうですわ！エリート!!つまり私の事ですわ!!まあ、先程の無礼は目を瞑って挙げますわ。何たってエリートですから私は！寛大な心を持つ私ですから貴方がどうしても

と言うならば…貴方にＩＳの事を御教えしてあげても良くって？」

そう言って一夏に提案を持ちかけたが…

「いや、五代さんいるし別にいいぜ？」

キッパリと拒否していく一夏

「なっ!?で、ですが！私は入試の際に教官を倒して「教官なら俺も倒したぞ？」はあぁぁぁぁっ!?」

セシリアが自分が教官を倒したと言い終えようとすると一夏がポツリと自分も倒したと言ってしまいセシリアは驚いてしまうのだった。

「わ、私だけの筈では!?」

バン!!と一夏の机を叩いて一夏に詰め寄り始めていく

「それって女だけはって話だろ？それに俺の場合は倒したと言うより向こうから突っ込んできて勝手に自滅したと言う方が正しい気がするんだが…」

セシリアの気迫に若干戸惑いながらも一夏はそう語り始めるも…

「納得いきませんわ!?素人当然の貴方が教官を倒したなんて！」

「いや、話聞けよ…」

もはや聞いてないセシリアに呆れる一夏…

「そ、それじゃあ…はっ！貴方もこの方と同じ教官を倒したのですか!?」

すると一夏から雄介へと対象が変わり詰め寄り始めていく
「え、えっと…ど、どうかな?ノーコメントじゃダメ?」
詰め寄るセシリアに若干怖がりながらも言葉を濁しながら黙秘し様としていくが…
「当たり前ですわ!?」
「デスヨネー……うーん…えっと…」
なんとかしようと考えている内にチャイムが鳴り始めていき
「くっ!また来ますわ!」
そう言ってセシリアは自分の席に戻っていくのだった。
「えっと…お疲れ様です…五代さん…」
詰め寄られた雄介に労いの言葉を送る一夏
「あ、うん…それと勉強の続きはまた後でね?」
そう言って参考書を持って雄介も自分の席に戻っていくのだった。

「さて…授業を始める前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラ

ス代表者とはクラス対抗戦だけではなく、生徒会の会議や委員会の出席など、まぁ…クラス長と考えて貰えばいい…自薦他薦は問わん…誰かいないか？」
「はい！織斑君がいいと思います!!」
「私も同じです!!」
「賛成です！」
「はっ？えっ!?えぇ!?」
「ふむ、織斑だな？「はっ？いやいやいや!?俺はやらねぇぞ!?千冬姉ぇ!!」此処では織斑先生だ馬鹿者!!」
　スパァァァン!!っと高速で一夏のところに行き出席簿で叩くと一夏はゲンムッ!?とか言いってしまう
「言っておくが取り消しは出来ん…」
「んな横暴なぁ…」
　千冬に言われてガクッと落胆していき
「後…伝えておくが…五代は推薦出来んからな？」
「へっ!?なんで五代さんだけダメなんだよ!?」
　まさかの発言に噛み付く様に一夏が声を荒げていき
「当たり前だろ？五代さんが出たら完全に出来レースになるな…」

「へっ？出来レース？」
千冬の言葉にキョトンとしながら聴き返していき
「えっと…お、織斑先生…流石にそれ言ったら不味いんじゃ…？」
千冬が何を言おうとしているのか理解した雄介は恐る恐る手を挙げていく
「こうでも言わんとコイツ等は納得しないだろう？」
「うっ…！」
千冬に言われて何も言えずにいる雄介
「どう言うことだよ千冬姉ぇ…」
「織斑先生だと言っているだろうが…はぁ……まあいい私が言いたいのは、雄介は試験で教官を倒している」
『おおおっ!!』
千冬の言葉に女子生徒たちが騒ぎ始めていき
「な、なんですって!?」
セシリアは驚き
「うおっ！すげぇ!!五代さんってやっぱ凄い人なんだな!!」
一夏は興奮状態である…しかし此処で千冬の言葉で更にクラス全体が驚く羽目になる。

「ちなみに五代と戦った教官は…私だ。」
ニヤリと不敵な笑みを浮かべながら暴露していく千冬
「……はっ?」

『えええええええええっ!!!????』
当然の反応でクラス全体!!!驚いていた雄介はと言うと…
「(ははは…元気いっぱいな子達だなぁ～～～)」
もはや現実逃避に近い感じで遠い目をしながらも実際にそう思っていたのだった。

～ＥＰＩＳＯＤＥ．１４「仲裁」～

「うるさいぞお前たち…他のクラスの授業の妨げになるだろうが…」
　そう言ってクラス全体に注意する千冬…しかしだ、その発端は貴女の言葉にあると言ったら迷わす出席簿が飛んで来るだろう…
「いやいやいや!!千冬姉ぇが負けるなんて普通信じられるか!?「だから織斑先生だ馬鹿者!!（スパァァァン!!）」ふべらっ!?」
「全く…何度言えば分かるんだお前は……」
　一夏のメリハリの付けられなさに呆れながら頭を抱える千冬
「さて…他に居るものがいなければ織斑がクラス代表者でいいんだな?」
　そう言って生徒たちを見回しながら確認を取ろうとした瞬間…
「納得がいきませんわ!」
　自分の机を叩きながら立ち上がるセシリアは大声で否定し始める。
「その様な選出は認められません!男がクラス代表だなんていい恥晒しですわ!!このセシリア・オルコットにその様な屈辱を一年も味わえと言うのですか!ましてやこの様な

無知でど素人な男が選ばれて代表候補生の私が選ばれないなんて…どうかしてますわ！」

「……イギリスだって不味い料理しかない癖に」

セシリアの言葉にムカついたのか聴こえる声で一夏はそう言って

「なっ!?あ、貴方!!私の祖国をを侮辱致しますの!!?」

「先に言ったのはそっちだろう!?」

徐々にヒートアップし始め口論になっていくすると…

ーーーパンッ！パンッ！ーーー

すると大きい音が響き渡り一夏もセシリア…千冬や真耶…他の女子生徒たちが音のした方を向くと…

「二人共落ち着こうか……」

そこには席を立ち手を合わせたまま二人に近づく雄介だった。

「五代さん…」

「貴方は……」

「まず、オルコットちゃん…」

「は、はい！」

いきなり呼ばれてオルコットはビクン！と反応しながら返事をしていき

「えっと…そこまで怖がらなくていいよ？何もしないから！ただ…さっきのことで一夏君に謝って欲しいと思ってね？」
「なっ、何故私が！」
「確かに一夏君は、ＩＳに関しては素人かもしれないよ？でも…キツく言う必要はないんじゃないかな？」
「そ、それは…」
雄介の言葉にセシリアは詰まってしまい、目を逸らしてしまう。
「（やっぱり……この子何かあるのかな？）」
雄介はセシリアの態度に何かあると感じたのかそれ以上言わなかった。
「……それから一夏君」
「は、はい！」
「さっきイギリスは不味い料理しかないって言っていたけど…そんなことないよ？俺行ったことあるから分かるんだ。」
今度は一夏の方を向いてイギリスのことをフォローし始めるのだった。
「うっ…そ、それは……」
一夏もセシリアに向かって言った自分の言葉を考えながら言い過ぎたと思ってしまい…言葉を詰まってしまう

「まぁ…お互いに言い過ぎたってことでお互いに謝ろう…ね？」
一夏とセシリアは気まずそうに視線を逸らしており…
「ほら…二人共…」
雄介は一夏とセシリアを後押ししていき
「その…オルコットさん…さっきは…イギリスのことを悪く言ってごめん…」
そう言って一夏はセシリアに向かって頭を下げながら謝罪をしていき
「わ、私も申し訳ございませんでした…！貴方のことを侮辱してしまい…不快な思いをさせてしまい…本当に申し訳ございませんでした。」
セシリアも一夏に対して頭を深く下げて謝罪を行うのだった。
「いや…俺も…「ですが！私は認めるわけにはいきません!!なので決闘ですわ!!」なんでそうなるんだよ…」
何故か決闘宣言をされて一夏はげんなりしながらセシリアを見つめていき
「但し…私は全身全霊で貴方に挑みます…そのおつもりで、貴方も全力で私に挑んで下さい！分かりましたね!!」
「っ!?あ、ああいいぜ！全力で戦ってやる!!」
セシリアの言葉に燃える一夏はそう返していき
「（よかった～無事に収まったみたいで…）」

二人の様子を見て雄介がホッとする様に安心して笑みを浮かべていく

「全く…勝手に話を進めおって…！まあいい、織斑…そしてオルコット一週間後にクラス代表の決定試合…模擬戦を始める!!では、授業を始めるぞ」

そう言って千冬は授業を開始するように呼びかけるのだった。

～ＥＰＩＳＯＤＥ．１５「驚愕」～

ーーーＩＳ学園（教室１年１組）ＰＭ．１６：０５ーーー

初日の授業が全て終わって、放課後になると…クラスの女子生徒たちは帰る準備をしていた。その中…雄介と一夏は、少しだけ今日の授業の復習を行っていたのだった。

「ふぅ…今日はここまでにしようか」

時間を見ながらそう言って勉強を止めていく雄介

「はぁ～～～なんかドッと疲れた感じがするなぁ～」

そう言って一夏は背を伸ばして身体の疲れをほぐしていく

「あはは…でも、少しずつだけど知識が付いたんだし上出来だよ。」

「そ、そうですか？でも、確かに少しだけＩＳのことわかった気がします。」

「そう？なら教えた甲斐があったよ♪」

そう言って笑顔でサムズアップをする雄介

「あっ、織斑君！五代さん！よかった、まだいたんですね！」

こちらに向かって雄介と一夏を呼んで近づいていく真耶

「山田先生？どうしたんですか？」
「あっ！もしかして……！」
一夏は首を傾げながら聴き、雄介は状況を理解したのか納得するように手を叩き
「はい！五代さんが思っていることで間違いありません。織斑君は今日から寮で生活しますので部屋の鍵を渡しに来ました！もちろん五代さんの分もあります。」
「へっ？俺しばらくは自宅から通学って聞きましたけど……？」
真耶の言葉に首を傾げながらそう答える一夏
「え、えっとですね…政府からの指示で急遽学生寮に移るようにと……」
真耶は一夏に対して申し訳なさそうに事情を説明をしていく
「そ、そうだったんですか…分かりました。」
真耶の説明に納得して一夏は部屋の鍵を受け取っては、雄介も真耶から部屋の鍵を受け取っていく
「んっ？あれ？俺の部屋の番号と五代さんの部屋の番号違うんですけど……」
「あっ！す、すみません…！その事なんですが……急な変更なので織斑君は、相部屋になってしまったんです……。」
「えっ！俺が相部屋ですか!?」
「はい、申し訳ありません…」

そう言ってしょぼくれる真耶

「わ、分かりました！相部屋でいいですから!!だからそんなに落ち込まないでください！」

「ほんとですか……？我慢してくれますか？」

「我慢しますから！」

「ありがとうございます!!」

一夏の力強い返事に彼女はなんとか笑顔を取り戻してくれたようだ。

「(そういえば俺の部屋は1人部屋って言ってたっけ？)」

雄介は一夏と真耶のやり取りを見ながらそう思って部屋の番号を見つめて

「あっ！そうでした！いくつか連続事項があります。まず、お二人はしばらくの間大浴場は使えません。」

「なんでですか？」

「えっとね…一夏君。此処、元々女の子だけだったんだよ？だから一夏君や俺が来て入浴時間を調整しなきゃいけないし…それだと山田先生たちの負担が大きいと思うんだ。まあ…落ち着いたら多分俺たちも使えると思うから気長に待とうね？」

「そ、そうっすね…」

「うぅっ…五代さんの優しさが身に染みます。」

感動する様に涙を拭く真耶
「あはは…」
その後、千冬が来て一夏に荷物を部屋に最低限必要な物を持って行った事などを話してから別れて、一夏と一緒に雄介は学生寮に向かって行くのだった。

ーーーＩＳ学園【学園寮】ＰＭ．１７：４５ーーー
「わお…もはやホテルじゃんか」
学生寮の玄関口にたどり着くと一夏がそう呟いていき
「そうだね…（いつ見ても凄いところだよなぁ～）」
雄介は心の中でそう呟きながら一夏と一緒に中に入っていくのだった。
「えっと……１０２５……あっ此処だ。」
すると一夏は自分が今日から住う部屋の前に到着していき
「今日は色々あって疲れただろうし…ゆっくり休んでね？」
「はい！五代さんもお疲れ様です。」
そう言って二人は別れていき雄介は自分の部屋の場所に向かって行くのだった。

「えっと…俺の部屋は、１０４３か～千冬さんは一人部屋を用意していると言っていたし…まぁ…お年頃の女の子と同室になるのはかなり気を使うだろうし…千冬さんには感謝かな？」

そう言って自分がこれから住う部屋に到着すると鍵穴に鍵を差し込みガチャっ！と鍵を開けてはドアノブを回してドアを開ける。しかし次の瞬間……思ってもみない事が起きたのだった！それは……

「おかえりなさい。お風呂にする？ご飯にする？それとも……わ・た・し♡？」

裸エプロンでウィンクをしながら雄介を出迎える薄青色の髪の少女がそこにいたからだ……。

～ＥＰＩＳＯＤＥ．１６「更識」～

雄介が自分の部屋に入ると…見知らぬ少女が裸エプロンの格好のまま出迎えてきた為…雄介は、思わずその場で固まってしまったのだった。

「……」

雄介はゆっくりとドアを閉め……部屋のナンバープレートを確認し始めた。

「うん……此処、やっぱり俺の部屋だね。じゃあ…さっきのは……」

先程の少女は幻だと思い込んだが改めて部屋のナンバープレートを見て現実に戻されたのだった。

「さっきの子…何処かで見た様な?それに此処一人部屋の筈だよね。うーん……」

しばらく考えながら…もう一度ドアを開けてみる事にする雄介

ーーーガチャッーーー

「おかえりなさい。私にする?私にする?それとも…わ・た・し♡?」

三拍子並みに自分の事を象徴した言い方で、雄介に聴きながらウィンクをする少女……

「……お邪魔しました～～～」

「へっ…?ちょっ!?」
そう言って再び扉を閉めようとする雄介に…少女は慌てて雄介に近づくがガッチャン!と閉められてそれ以降の言葉はかける事はなかった。
「うん、どうしようか……」
雄介はどうしようか考えているとそこへ……
「五代…?どうしたんだ?こんなところで立ち尽くして…部屋に入らないのか?」
五代の後ろに、腕を組みながら立っている千冬がそこにいた。
「あっ!織斑先生…!!実は……」
雄介は状況を説明し始めたのだった。
「なるほど…はぁ……何をしてるんだアイツは……」
雄介の話しを聴いて頭を抱えながら溜息をしていき
「すまない五代…少し退いてくれ……」
「あっ、はい、分かりました。」
千冬に扉から離れる様に言われ、雄介は下がっていくと千冬は扉を開けていく
「もう!酷いじゃないいきなり閉めるなん…て……」
少女が怒りながら雄介に抗議しようするがそこにいたのは雄介ではなく…
「ほう…そんな格好でお前は一体何をしているんだ?更識?」

「おおおおおおっ、織斑先生!?ななななっ、何故こちらに!?」
　ニコニコした表情はしているが目が全く笑っていないむしろ…ハイライトの消えた千冬が腕を組んでいたのだった。ちなみにその表情は雄介には見えない為、少女が固まっては慌てて顔が真っ青になっている事に首を傾げていた。
「私に質問するな……むしろ貴様が私の質問に答え無ければいけないんじゃないか?」
　ドス黒いオーラを纏って更識という少女に問い掛けていく
「取り敢えず着替えろ…すぐに!わかったな?」
「……はぃ」
　千冬の威圧で、身体が縮まったように小さく返事をしていく
「全く…すまない五代さんしばらく待っていてくれ…」
「あっ、大丈夫ですよ!」
「すまない…ほら、早く着替えろ!更識!!」
「は、はいぃぃぃっ!!」
　千冬の威圧に慌てて着替えがあるところに向かって行くのだった。
「全く…一夏やアイツの妹だけではなく更識も私にどれだけ負担を増やせば気が済むんだ…」
　疲れた表情で頭を抱えてそう呟く千冬

「大丈夫ですか?」
心配そうに声を掛けていく雄介
「ああ…もう慣れたさ…」
そう言って遠い目をしていく千冬だった。

しばらくして…
「えっと…お待たせしました〜……」
若干震えながら少女は制服に着替えており千冬と雄介に近づいていく
「全く…お前は一体何をやっているんだ?」
呆れながら少女をジト目で見つめながら聴いて
「じ、実は…彼の事が気になったので顔合わせがてら色々と聞こうと思いまして……」
そう答えて口元を隠すように扇子を開かせる。そして扇子には〝興味津々〟と書か

れており
「だからと言って限度を弁えろ……わかったな？」
　疲れた様子なので、あまり怒る事はしずに注意だけしておく千冬
「すみません…織斑先生…。」
「私にではなく、五代さんに謝れ」
「そうですね……あの、先程は破廉恥な格好をして驚かせてしまい申し訳ございませんでした。」
　そう言って雄介の方に向くと深々と頭を下げて謝罪する少女
「大丈夫！驚いたけどあまり気にしてないから！それよりキミは…あの時俺の後をつけてた…」
　ふっと思い出すように少女に話しかけていき
「っ!?（えっ！何故それを!?）」
　少女は目を開いて口には出さないが驚いてしまう。
「……（この様子じゃあ、気配を消したのにわかったって感じか…そうなると……雄介…お前は本当に何者なんだ？）」
　千冬はそんな雄介に対して気になってしまうのだった。
「んっ…？織斑先生どうしたんですか？」

「っ！い、いや！なんでもない…それより更識。五代さんに自己紹介はしないのか？」
「あっ！忘れてました…！コホン…はじめまして五代雄介さん。私は更識楯無といいます。クラスは二年で…ロシアの国家代表をしており…生徒会長をやっています。どうぞ宜しくお願いします。」
少女…更識楯無は微笑みながら自己紹介して、口元を隠すように扇子を開かせて〝最強〟と書かれていたのだった。